

# 後漢鏡の編年

岡村秀典

- 
- |             |                    |
|-------------|--------------------|
| はじめに        | 4. 後漢墓による検証と実年代の比定 |
| 1. 編年の方法    | 5. 後漢鏡の様式          |
| 2. 動物文鏡群の編年 | おわりに               |
| 3. 内行花文鏡    |                    |
- 

## 論文要旨

漢鏡は、年代を測る尺度として大いに活用され、中国考古学と日本考古学との接点のひとつとなっている。本稿は、中国考古学の立場から、前漢鏡研究の続編として、後漢代の方格規矩四神鏡、獸帶鏡、盤龍鏡、内行花文鏡の4つの鏡式をとりあげ、型式学的研究法にもとづいた編年を試みるものである。

その具体的な方法は、次のとおりである。まず一連の変化を示す単位文様の系列を想定し、次に1面の鏡における単位文様の共存からその相関関係を明らかにすることによりひとつの鏡式の型式分類をおこなう。これを各鏡式について実行したうえで、続いて共通する単位文様によって鏡式間の横のつながりを検討する。この型式に紀年鏡や漢墓での出土例によって実年代を与え、最後に洛陽や広州などでの漢墓編年と対比させることにより、組み立てた編年を検証する。

この編年にもとづいて後漢鏡を大きく3期に区分し、漢鏡5期、漢鏡6期、漢鏡7期とした。

1世紀中ごろから後半の漢鏡5期では、前代の方格規矩四神鏡と獸帶鏡が継承され、四神を主体とした宇宙観が変容していく過程がみられた。内行花文鏡もまた、前代の連弧文銘帶鏡から変化してきたものである。このような王莽鏡を継承した鏡式が主体となるなかで、盤龍鏡は立体的な浮彫表現をもってこの時期に創出され、獸帶鏡でも細線式から浮彫式のものが分岐した。

2世紀前半の漢鏡6期では、方格規矩四神鏡と細線式獸帶鏡の主文は鳥文や渦文に簡略化し、盤龍鏡も次第に簡略になっていった。内行花文鏡には蝙蝠座のものが出現し、おもに華北に分布するのに対して、浮彫式獸帶鏡は華南に分布が偏り、様式の分化が少しずつ顕著になっている。この時期にはまた、新しい宇宙観をもつ画像鏡や神獸鏡、夔鳳鏡などが創案され、漢鏡7期に受け継がれていった。

## はじめに

漢鏡は、その文様が鋭敏に変化しているため、年代を測る尺度として大いに活用されている。日本の弥生・古墳時代の研究者も、鏡のもつ意義に早くから着目し、漢鏡の編年研究は日本考古学と中国考古学との接点のひとつとなっている。

漢鏡は、いうまでもなく、漢文化の所産であり、文様や銘文には漢人の観念、精神が反映されている。しかし、これまで日本考古学の研究者は、ややもすれば漢鏡の編年のみを目的とするきらいがあり、『洛陽燒溝漢墓』(洛陽区 1959)の鏡編年を無批判に利用してそれで事足りりとするか、独自に編年をおこなっても漢文化のなかでの意味について追究することはほとんどなかった。この反省にたって本稿は、前漢鏡の研究(岡村 1984)の続編として、中国考古学の立場から後漢鏡をとりあげ、型式学的方法による編年とそれによって闡明できる後漢鏡の様式について論ずるものである。なお、紙幅の関係から、後漢後半期に出現する神獸鏡や画像鏡、夔鳳鏡などの編年は別稿にゆだね、その時期の様式論は予察をおこなうにとどめたい。

## 1. 編年の方法

### (1) 研究史

①鏡式の設定 漢鏡の著録は北宋代の王黼による『博古図録』を嚆矢とし、その後、清代には『西清古鑑』(1749年)、民国代には『古鏡図録』(1916年)や『小校經閣金文拓本』(1935年)などの大部の著録が編纂された。これらの著録では鏡それぞれに時代と名称が与えられたが、鏡の時代については漢代を一括し、銘文を主とした便宜的な命名がおこなわれているにすぎなかった。鏡の部分名称を定め、図像文様を基準とした鏡の分類、すなわち鏡式の設定<sup>(1)</sup>をおこなったのは、中国に先駆けて近代的な考古学を学んだ日本の研究者である(三宅 1897, 高橋 1911)。また鏡の年代にも関心が向けられ、紀年鏡の集成と積読がおこなわれたが、大半が後漢後半期以降の神獸鏡であるという制約があった。

②鏡式編年 漢鏡の編年研究を大きく前進させたのは富岡謙蔵である(1920)。富岡はまず銘文をもとに方格規矩四神鏡を王莽代に、神獸鏡を魏晉代に位置づけ、つづいて文様の様式から前漢鏡やそのほかの鏡式の年代について考察した。富岡に師事した梅原末治は、鏡の編年の基準として①銘文、②文様の様式研究、③化学成分、④共伴遺物の4項目をあげ、富岡の仕事を実践的に継承した(梅原 1925a)。漢楽浪郡の所在した西北朝鮮では、このころ、大がかりな漢墓の発掘によって良好な共伴関係がえられるようになり、梅原や後藤守一(1926)らによって、各鏡式のおおよその年代が推測されるまでになっていた。こうした日本の研究者の成果をうけ、中国でも『嚴窟藏鏡』(梁 1940~42)のような専論が著された。

新中国の成立後、大規模開発にともなう漢墓の組織的な調査が実施され、漢代文物の編年研究は著しく進展した。墓室と土器の編年をもとに『洛陽燒溝漢墓』は漢墓を6期に区分し、これにしたがって各鏡式の年代を決めることが可能になった(洛陽区 1959)。すでに30年あまりを経たこんにちなお漢墓編年の基準となっている画期的な仕事であり、漢鏡編年の有効性についても高い評価をあつめている。しかし、それは漢鏡の編年を目的としたものではなく、鏡式の使用年代を漢墓の編年から導いているにすぎないことには注意すべきであろう。

こうした新中国での成果をふまえて鏡を網羅的に集成、整理したのが樋口隆康『古鏡』(1979)であり、わが国では後藤守一『漢式鏡』以来の専論として利用価値が高い。しかし各鏡式の盛行年代が示されているものの、細かい編年を意図した型式分類とはなっていないところがある。

**③型式学的研究** 漢鏡は、鈕座、主文、乳、外区などの部分から構成され、各部分には相互に独立した文様がほどこされている。これを単位文様(属性)と呼ぶ。単位文様の認識は、戦国鏡について梅原末治が早くに示しており(1935)、戦国鏡の分類を体系的におこなったカールグレンは、さらに一部の単位文様の変化系列(組列)を想定し、それによって鏡の前後関係を推定している(Karlgren 1941)。これは型式学的研究の萌芽段階と位置づけられる。

徹底した文様単位の分解とその同一個体内での共存関係を検討することにより、三角縁神獣鏡というひとつの鏡式について型式分類をおこなったのが小林行雄である(1971)。それは鏡式の特殊性ゆえに必ずしも編年を意図した型式分類ではなかったが、この方法はその後継承されていた。中国東北地方から朝鮮・日本から出土する多鈕鏡についての研究(宇野 1977)や前漢代の方格規矩四神鏡についての研究(山越 1974、藤丸 1982)は、編年を目的としたその実践ということができる。さらに型式学的研究の洗練をめざす田中琢は、方格規矩四神鏡系倭鏡(仿製鏡)について、まず主文の獣像の変化系列を想定し、それをほかの単位文様との相関関係によって検証するという方法で型式分類と編年をおこなった(1979, 1983)。田中とはほぼ同じ方法によって西村俊範は後漢代の双頭龍文鏡について型式分類と編年を実践している(1983)。こうした研究によって鏡式の型式分類の方法はほぼ確立したといっていよう。

しかしそのような漢鏡の研究はまだ一部の鏡式についてはじまったばかりであり、しかもそれはひとつの鏡式についての個別的な型式学的研究である。漢代には異なる鏡式が同時期に併存していたのであるが、鏡式それぞれの個別的な分析を積み重ねていっても、漢鏡の体系的な理解がえられるとは考えられない。漢鏡の様式を論じる合理的な分析法が必要なのである。幸い、鏡の単位文様は1面の鏡のなかで相互に独立した単位として存在するだけでなく、それが独立しているがゆえに異なる鏡式に共有されるという特性がある。異なる2種の鏡式にみられる要素を折衷した鏡の存在には早くから気付かれ、たとえば梁上椿はそれを「中間性」をもつ鏡と位置づけ、鏡式間の関係を考える手がかりとしている(1940~42)。さらに単位文様をもとにした型式分類をおこなった田中琢は、倭鏡(仿製鏡)における鏡式間の単位文様の共有関係から、その時間的併行関係や作鏡体制の問題に切り込んでいる(1979)。田中は倭鏡の一部についてそれを例示してい

るだけだが、これによって鏡全体の体系的な編年をおこなう方法は準備されたといえよう。

## (2) 分析の手順

本稿では 単位文様の分析にもとづいた型式学的研究によって後漢鏡の編年をおこなう。分析方法は、前節の研究史に明らかにし、またすでに前漢鏡について実践しているので(岡村 1984)、要点のみを記すにとどめる。

まず、鏡式の命名と分類は先行研究にしたがう。本稿であつかう鏡式は、方格規矩四神鏡、獸帶鏡、盤龍鏡、内行花文鏡である。次に一連の変化を示す単位文様の系列を可能なかぎりあらかじめ想定し、1面の鏡における単位文様の共存からその相関関係を明らかにし、ひとつの鏡式の型式分類をおこなう。これを各鏡式について実行し、続いて共通する単位文様によって鏡式間の横のつながりを検討する。これに紀年鏡や漢墓での出土例によって型式に実年代を与え、最後に漢墓編年との対応を検討し、組み立てた編年を検証する。

なお、漢鏡の編年にあたって留意すべきは、鏡の図像文様のもつ意味である。鏡匠は龍や虎といった形象について熟知していたから、日本の仿製鏡にみるような、意味のない図像へと漸移的に退化していくことはほとんどなかった。後漢代の双頭龍文鏡にみる主文の一連の退化(西村 1983)は、漢鏡のなかではきわめて例外的である。漢鏡の文様変化は、ほかの図像文様に置き換わったり、図像が抽象的な記号に置き換わったり、鏡匠の手ぬきによって重要でない文様の省略によって生じるのがふつうである。なかでも主文の置換は鏡式の意味変容を暗示するため重要であるが、いずれにせよ、銘文や文様の変化の意味を考え、当代の意識、観念の推移を読み取る努力が必要であろう。

## 2. 動物文鏡群の編年

いまかりに動物文鏡群と呼んだものは、方格規矩四神鏡、獸帶鏡、盤龍鏡を含み、瑞獸を主文とする一群の鏡である。これらは相互に単位文様を共有し、深い横のつながりが認められる。まず各鏡式を型式分類したうえで、相互の併行関係を検討することにしたい。

### (1) 方格規矩四神鏡

細線表現の四神を主体とする瑞獸を主文とし、方格鈕座、TLV形のいわゆる規矩文をもつ鏡式である。四神がなく、鳥や渦文だけで構成されるものがあるため、方格規矩鏡と総称されることがある(樋口 1979)。しかし鏡式の命名にあたっては図像文様のもつ意味や系列関係を重視すべきであり、ここでは方格とTLV形の「規矩」とで象徴する宇宙に細線表現の四神を代表とする瑞獸を配した鏡(林 1973)として成立し、その系列に位置づける鏡、と定義し、梅原末治(1925b)にしたがって方格規矩四神鏡と呼ぶことにする。



めに、方格規矩四神鏡Ⅳ式も対象に含めることにする。

文様単位には、鈕座、主文、銘文、乳、TLV形、外区文様がある。

鈕座は、四葉文と十二支の銘帯をもつ方格とに区分できる。四葉文は、扁平な宝珠形の四葉の間に円形の子葉を表現したもの(a)、蝙蝠形の四葉の間に子葉をもつもの(b)、扁平な宝珠形の四葉のもの(c)、四葉文のないもの、に分ける。十二支銘は、乳の間に篆書体風のやわらかい丸みをおびた字形をいれたもの(a)、乳の間に隸書体風の直線的な字形をいれたもの(b)、乳が線文に、銘文が列線文にかわったもの(c)、銘帯のないもの、に分ける。四葉文の変異は系列的な変化ではないが、十二支銘はa→b→cという一連の変化、すなわち字形の変化とその列線文への転化が想定できる。

主文は、四神と瑞獣とからなる8像に小像や渦文を加えたもの(a)、四神と瑞獣とからなる8像からなるもの(b)、鳥が3体以上になったり、玄武の亀と蛇が分離するなど、四神と瑞獣との組合せが不完全になったもの(c)、8像すべて鳥のもの(d)、渦文のもの(e)、主文のないもの、に分ける。王莽代の文様の発達した方格規矩四神鏡では、四神の各々に対になる瑞獣がほぼ固定し、方格の角をはさんで向い合わせに配置されるが(鈴木 1970)、この四神と瑞獣との基本的な組合せがくずれ、鳥に置き換わっていくa→b→c→d→eという変化の方向が想定できる。

銘文はすべて七言句で、樋口隆康の分類を用いて次のように類別する。

- K 尚方作鏡真大巧 上有仙人不知老 渴飲玉泉飢食棗 浮游天下敖四海 徘徊神山采芝草  
寿如金石為国保
- L 尚方作鏡大母傷 巧工刻之成文章 左龍右虎辟不祥 朱鳥玄武順陰陽 子孫備具居中央  
長保二親樂富昌 寿敵金石如侯王
- N 王氏作鏡四夷服 多賀新家人民息 胡虜殄滅天下復 風雨時節五穀熟 長保二親得天力  
官位尊顯蒙祿食 伝告后世樂無極

樋口はまた句数が減少する方向への簡略化を想定している(1953)。

乳には連弧文座と円座とがあり、8個のもの、4個のもの、ないもの、がある。

TLV形はT、L、V形に分解して各々の存否を検討する。完全にそろったものから不完全なものへの省略が想定できる。

外区文様は、流雲文と鋸齒文との二重の文様帯からなるもの(雲1)、流雲文帯だけのもの(雲2)、鋸齒文+複線波文+鋸齒文となるもの(鋸a1)、鋸齒文+単線波文+鋸齒文となるもの(鋸a2)、鋸齒文+無文+鋸齒文となるもの(鋸b)、鋸齒文+複線波文となるもの(鋸c1)、鋸齒文+単線波文となるもの(鋸c2)、鋸齒文だけの文様帯となるもの(鋸d)、に分ける。このなかで雲1→雲2、鋸a1→鋸a2→鋸b、鋸a1→鋸c1→鋸c2→鋸dという文様帯の省略化の方向が想定できる。なお、鋸a1の外側に圈線がまわる外区文様のものは三角縁神獸鏡に近い特殊な鏡であり(福永 1991)、ここでは除外して扱うことにする。

③単位文様の相関 単位文様に系列的な変化が想定できたものに、鈕座の十二支銘、主文、外

区文様があり、まずこの相関関係を検討することにしよう。

表1は十二支銘と主文との相関をみたものである。十二支銘は方格内にあって、大地の方位を表示するものであり、主文の四神は宇宙にあって方位を表示するものであるから、その変化は相互に関連すると予想される。結果として正の相関がみられるが、十二支銘があっても四神と瑞獣との主文構成に動揺がみられたり（十二支銘bと主文c）、主文の四神が整っていても十二支銘が抽象的な列線文に転化したもの（十二支銘cと主文b）が存在する。とくに、主文の四神が完備していても（主文a・b）鈕座に十二支銘のないものが一定数あることは、方格規矩四神鏡の世界において、十二支銘によって大地の方位を明示する必要は必ずしもなかったことを意味している。

表2は主文と外区文様との相関をみたものである。各々に想定した変化の方向が一致することを示す強い相関がみられる。続いてこのほかの文様単位についても相互に相関を検討することが好ましいが、煩雑にすぎて退屈なことでもあり、順序が逆になるのを承知で、これをもとにさきに型式を設定しておきたい。<sup>(3)</sup>

④型式の設定 前漢代の方格規矩四神鏡も外区文様と主文を基準にⅠ式からⅣ式に分類したが、ここでⅣ式も含め、後漢代のものを次のように分類する。

Ⅳ式：外区文様が雲1または鋸a1で、主文aのもの。

ⅤA式：Ⅳ式と同じ外区文様で、主文bのもの。

ⅤB式：外区文様が雲1または鋸a1、鋸a2、鋸bで、主文cのもの。

ⅤC式：外区文様が鋸a1または鋸a2、鋸b、雲2で主文dまたはeのもの。

Ⅵ式：外区文様が鋸c1または鋸c2で、主文dまたはeのもの。

Ⅶ式：外区文様が鋸dで、主文dまたはe、主文なしのもの。

表2によって各单位文様の量的関係がわかるが、外区文様の型式別の変化について簡単にみておくと、Ⅳ式で80%を占めた雲1は次第に減少し、鋸a1と交替する。ⅤB式とⅤC式では省略形の鋸a2と鋸bが出現しているが、合わせて30%ほどである。主文についても同じように量的変化をみることができる。

表1 鈕座の十二支銘と主文との相関

		主			文	
		a	b	c	d	e
十	a	48	10			
二	b		24	15	1	
支	c		10	5	4	
銘	なし	8	19	16	38	23
						5

表2 主文と外区文様との相関

		主			文	
		a	b	c	d	e
雲	a	45	16	4		
外	鋸a	11	41	28	21	2
区	鋸b			9	10	2
文	雲b				3	
様	鋸c			1	5	2
	鋸d				4	20
						5

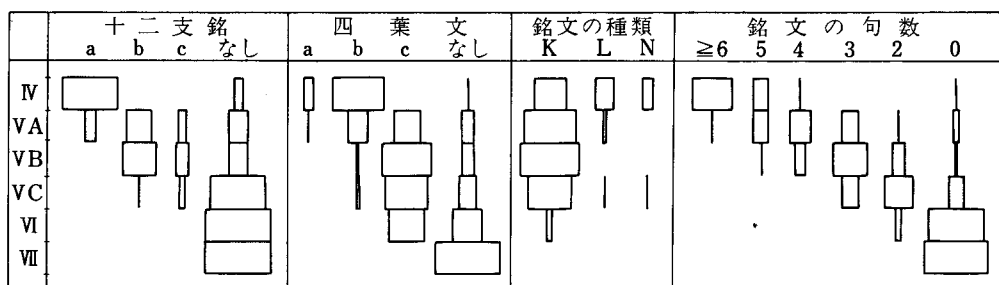


図2 方格規矩四神鏡の鈕座文様と銘文の型式別出現頻度

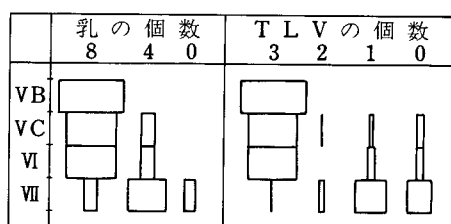


図3 方格規矩四神鏡の乳とTLVの型式別出現頻度

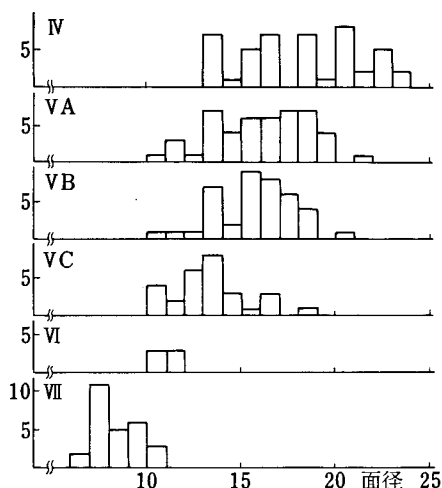


図4 方格規矩四神鏡の面径

次に外区文様と主文を基準に分類した型式と系列変化のみられなかったほかの単位文様との相関を検討しよう。鈕座と銘文について単位別に単位文様の出現頻度を取り、型式順の変遷を示したのが図2である。鈕座の十二支銘については、系列的な変化が想定されたため、さきに表1において主文との相関を検討した。この図によれば、鈕座の方格に十二支銘をいれて方位を表示したのはVB式までで、VC式との間に大きな変化がみてとれる。四葉文には系列変化がみられなかったが、図のように正の相関が確かめられる。VII式には十二支銘も四葉文もない簡素な鈕座になっている。銘文は、IV式ではK, L, Nの3種が並存していたが、VA式よりほぼ銘文Kに限られ、次第に句数が減少していったことがわかる。VI・VII式にはほとんど銘文がなく、VC式との間の変化が大きい。

乳とTLV形についてもみておこう。IV式の乳には連弧文座と円座の両方があり、VA式から円座だけに限定される。そしてVB式まではすべて乳が8個で、T・L・Vが3つともそろっている。もっともVB式にはT形が横棒だけになったものがあるが、意味するところはわからない。ところが図3のようにVC式より4個の乳のもの、T・LまたはT・V、あるいは



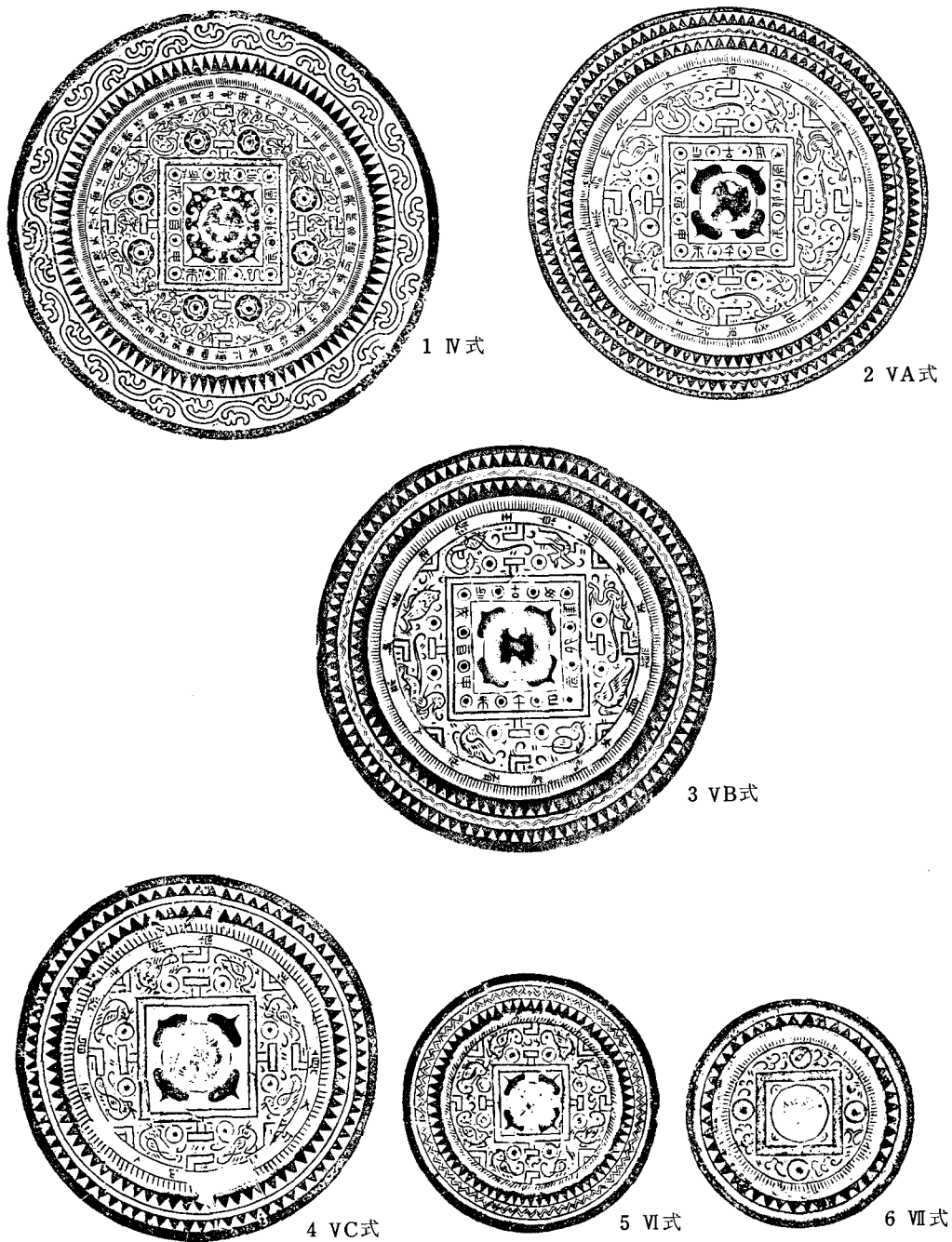


図5 方格規矩四神鏡の型式 (縮尺 約1/3)

はTだけのものが出現し、Ⅶ式にはTLV形の完全なものはほぼ消失する。TLV形は宇宙を象徴する重要な属性であるから、その欠落の意味するところは小さくないと考える。

文様のほかにも、面径にも変化がみられる。図4は型式別に面径の度数を示したもので、漸移的に面径が縮小していく傾向を読み取ることができる。Ⅳ式においてほぼ2cm間隔に山があるのは、尺度の使用と関係があるのかもしれない。Ⅵ式が量的に少ないことはさておき、Ⅳ式からⅥ式までは面径が10cmを切ることがなかったけれども、Ⅶ式にいたって10cm以下のものが出現し、急激に小型化している。

断面形態については、計測資料が少なく、型式との安定した対応が示せないけれども、斜縁化の方向の変化が看取できる。図1にあげた断面形態の1(Ⅳ式)は厚みのある平らな周縁をもち、鏡面と縁端面との角度が鈍角であるのに対して、2(VA式)では周縁の厚みがなくなり、鏡面と縁端面とが比較的鋭角になっている。その傾向はさらに強くなり、端部断面がわずかながら三角形に突出した3(VB式)あるいは周縁の外側が内側に比べて厚みのある4(Ⅶ式)へと変化している。断面形態は今後には注意すべき観察項目であろう。

⑤考察 以上の分析により、方格規矩四神鏡はⅣ式からⅦ式へと漸移的な一連の変遷をたどったことが明らかになった。それはこれまで経験的に予想されてきたように、簡略化の方向の変化であるようにみえるけれども、しかし単なる退化ではない。すなわちVB式とVC式との間で、主文が四神から鳥文に交替し、鈕座から方位を示す十二支銘がなくなり、宇宙の象徴であるTLV形が部分的に欠落しはじめたことは、それぞれの文様の意味から考えると、相互に関連した変化であり、全体として四神を中心とした宇宙観の変容であると評価できるからである。

編年に関しては、紀年鏡がないが、Ⅳ式にみられた銘文Nは「王氏作(昭)鏡……多賀新家」となることから、それは王莽代に位置づけられよう(富岡 1920)。また銘文KやNにみえる漢数字の「四」を「三」と表記するものは(岡村 1991)、Ⅳ式とVA式に存在する。後漢の紀年簡にも「三」の用例が存在するので(森 1963)、Ⅳ式はともかく、それだけの理由でVA式までを王莽代に含める必要はないだろう。残念ながらVB式以後は銘文Kの句数が減少して「浮游天下敖四海」の句まで記されることがほとんどなく、用例を確認できない。とりあえずⅣ式を王莽代、続くVA式を後漢初期に位置づけ、そのほかの型式については後に検討したい。

方格規矩四神鏡の銘文に関してひとつ興味深いことは、VA式以後は「尚方作」の銘文Kにはほぼ限られ、王莽の督造になるⅣ式の「王氏作」の銘文Nをのぞけば、「某氏作」の銘文がほとんどみられないことである。<sup>(4)</sup>それが実際に宮廷工場の尚方の製作か否かは別にして、同時期に併行する獸帯鏡や盤龍鏡に「某氏作」が多いことと対照的である。鏡の製作体制を考察する手がかりになるので、後章に改めてとりあげたい。

## (2) 獸 帶 鏡

円圈をなす鈕座の回りに四神をはじめとする瑞獸をめぐるせた鏡で、方格や「規矩」文がないことをのぞけば、全体の文様は方格規矩四神鏡に類似する。ただし方格規矩四神鏡は四神や十二支銘によって方位が決められ、配置に規制が働いているのにたいして、獸帶鏡は四神があっても方格や十二支銘がないぶんだけ比較的自由的な主文の配置となっている。

主文の表現によって細線式獸帶鏡と半肉刻獸帶鏡に大別されるのがふつうである(富岡 1920, 後藤 1926ほか)。樋口隆康はさらに細線式獸帶鏡、半肉彫獸帶鏡、盤龍座獸帶鏡、円圈鳥文鏡に分類したが(1979)、盤龍座獸帶鏡は細線式と半肉彫の両方に含まれ、円圈鳥文鏡は細線式獸帶鏡に含まれるから、やはり細線式獸帶鏡と半肉刻獸帶鏡の二大別が妥当であろう。ただし半肉刻という用語は中国語にはなじまないで、これを浮彫と改め、細線式獸帶鏡、浮彫式獸帶鏡と呼ぶことにしたい。

後漢代の獸帶鏡は方格規矩四神鏡に比べて資料数が少ないうえに、単位文様の変異が大きく、その分析は容易でない。しかし獸帶鏡の盤龍座は盤龍鏡に由来するものであり、細線式獸帶鏡は方格規矩四神鏡と共通点が多く、浮彫式獸帶鏡は画像鏡と関係があることから、鏡式間の関係解明の鍵ともなる重要な鏡式である。以上のことを念頭に置いて単位文様の分析を進めたい。

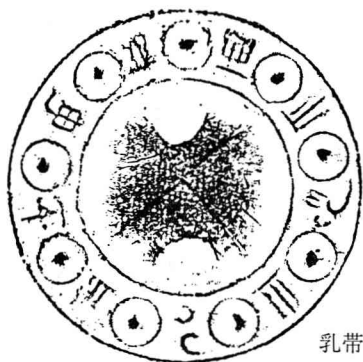
①単位文様の分析(図6) ここで分析の対象とするのは後漢代の獸帶鏡で、細線式獸帶鏡と浮彫式獸帶鏡をまとめて検討する。文様単位には鈕座、主文、銘文、乳、外区文様がある。

鈕座は、方格規矩四神鏡と同じように2つの文様帯に分けることができる。内帯は、小乳の間に芝草文や銘文をいれた乳帯文、盤龍鏡の主文と同じ浮彫表現の盤龍文、方格規矩四神鏡と同じ四葉文 $b$ または $c$ のもの、文様のないもの、に分ける。外帯は無文凸帯( $a$ )、凹帯( $b$ )、方格規矩四神鏡の十二支銘 $c$ と同じ列線文( $c$ )、かまぼこ状の凸帯に円圈と平行線をいれた有節重弧文( $d$ )、連珠文( $e$ )、文様のないもの、に分ける。変異が大きく、系列変化がたどれない。なお、銘帯が内区外周ではなく鈕座の外周に位置するものがあるが、これは鈕座文様には含めない。

主文は文様構成から、4像そろった四神に瑞獸を加えたもの( $a$ )、四神の一部が欠落し、瑞獸を加えたもの( $b$ )、四神とは無関係の瑞獸で構成されるもの( $c$ )、すべて鳥のもの( $d$ )、渦文のもの( $e$ )、に分ける。変化は $a \rightarrow b \rightarrow c$ という系列と $a \rightarrow b \rightarrow d \rightarrow e$ という系列が予想される。また文様表現は細線表現と浮彫表現とに大別した。細線表現は方格規矩四神鏡とも共通し、前漢代の獸帶鏡からのものであるのにたいして、浮彫表現は新しく創案された意匠である。浮彫表現はさらに、図像の輪郭を細線で表し、その内側を薄く半肉彫りにする表現( $a$ )と、輪郭線なしに地からすぐに浮彫になる表現( $b$ )に分けることができる。ちなみに鈕座の盤龍文も浮彫 $a$ 表現となっている。浮彫 $a$ は輪郭線だけをみれば細線表現と同じであり、浮彫 $b$ の表現は神獸鏡とも共通し、上面を平らにすれば画像鏡の図像表現にもつながるものであるから、細線 $\rightarrow$ 浮彫 $a \rightarrow$ 浮彫 $b$ という変化が想定される。浮彫 $b$ 表現をもつ「上方作系浮彫式獸帶鏡」については別稿に詳論



盤龍文



乳帶文

鈕座内帯



細線

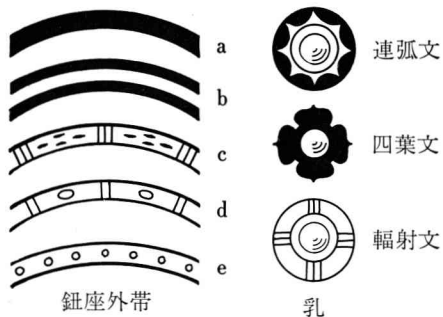


浮彫 a



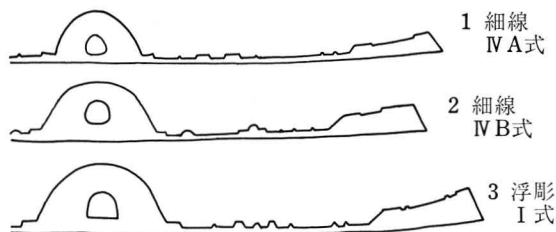
浮彫 b

主文の表現



鈕座外帯

乳



断面形態 (縮尺 $\frac{1}{2}$ )



外区文様

図6 獣帯鏡の単位文様

したので(岡村 1992)、本稿では細線と浮彫 a の表現をもつ獣帯鏡だけを分析することにした。

銘文は、方格規矩四神鏡でみた K, L が代表的なもので、ほかに

P 某氏作鏡自有紀 辟去不祥宜古市 長保二親利孫子

があり、またいづれにも属さない特殊な銘文もある。ほとんどが七言句で、その句数も検討する。

乳も多様であり、円座のほかに、四葉文座、連弧文座、輻射文座がある。乳の個数は主文の獣の数と同じである。

外区文様も多様であり、方格規矩四神鏡でみた雲 1, 雲 2, 鋸 a 1, 鋸 b, 鋸 c 1 のほか、逆 S 字形の唐草文+鋸歯文(唐 a 1), 逆 S 字形の唐草文だけ(唐 a 2), 雲気状の唐草文+鋸歯文(唐 b 1), 雲気状の唐草文だけ(唐 b 2), 影絵風に瑞獣や魚, 雲気をめぐらした文様+鋸歯文(画 1), 影絵風に瑞獣や魚, 雲気をめぐらした文様だけ(画 2), 素文のものに分けられる。方格規矩四神鏡で検討したように、変化の方向は鋸 a 1→鋸 b→鋸 c 1→鋸 d, そのほかのものは雲

表 3 獣帯鏡の主文と外区文様の相関

主 文	外 区 文 様											
	雲 1	鋸 a	唐 a 1	唐 b 1	画 1	雲 2	鋸 b	唐 a 2	画 2	鋸 c	鋸 d	素文
細 線 式	a	2	11		1	1						
	b		4						2	2	1	
	c			1								
	d		3				3	1		15	25	
	e										3	
浮 彫 式	a	1	1	1	2	11		2	3	1		
	b		3	1	1	2	4	2	1			
	c		5		1	4			3			
	d									4	4	2
	e											

表 4 獣帯鏡の主文と鈕座内帯との相関

鈕 座	細線式 主文					浮彫式 主文				
	a	b	c	d	e	a	b	c	d	e
乳 帶	11	3	1	2		6	7	6		
盤 龍	4	1				8	4	4		
葉 b						2				
葉 c		1				1	1			
なし	4			48	3	5	4	5	11	

1→雲2のように鋸歯文の省略化の方向が想定できる。

②**単位文様の相関** 単位文様に系列変化が想定できたものに、主文と外区文様があり、表3では主文を細線式と浮彫式とに分けて外区文様との相関関係を検討した。細線式のほとんどは鋸歯文の外区文様となり、四神をもつ主文aと外区の鋸a、鳥文になった主文dと外区の鋸cあるいは鋸dとの組合せが多く、方格規矩四神鏡に類似した相関関係であるのにたいし、浮彫式は外区文様の多様化にともない、一見その相関が判然としないが、主文aと外区の画1との組合せが比較的多いことがわかる。

表4は主文と鈕座内帯との相関を検討したものである。鈕座内帯には系列変化の想定できる単位文様はなかったが、細線式は主文aと乳帯文、主文dと文様のないものとの組合せが多く、主文の四神文から鳥文への変化に関連して鈕座内側の文様帯が省略されたと考えられる。ところが浮彫式のばあいは、その相関関係が判然としない。

③**型式の設定** 表3の相関および方格規矩四神鏡の分類を参考にして、外区文様と主文を基準に型式分類をおこなう。細線式獸帯鏡は前漢代をⅢ式まで設定しているのでⅣ式からはじめ、浮彫式はⅠ式からはじめることにする。

細線ⅣA式：主文aをもち、外区文様が鋸aまたは雲1など二重の文様帯のもの。

細線ⅣB式：主文bまたはcで、外区文様が鋸aまたは画2、鋸cのもの。

細線ⅣC式：主文dをもち、外区文様が鋸aまたは鋸b、唐a2のもの。

細線Ⅴ式：主文dをもち、外区文様が鋸cのもの。

細線Ⅵ式：主文dまたはeで、外区文様が鋸dのもの。

浮彫Ⅰ式：主文aのもの。

浮彫Ⅱ式：主文bまたはcのもの。

浮彫Ⅲ式：主文dで、外区文様が鋸cまたは鋸d、素文のもの。

要するに、細線式獸帯鏡においては、主文が四神を中心に瑞獣を加えたもの(ⅣA式)から四神が一部欠落して(ⅣB式)、鳥文だけのもの(ⅣC式)に転換し、これに関連して外区文様が省略されていく変化を示している。浮彫式獸帯鏡も同じように主文が鳥文へと変化するようにみえるけれども、浮彫Ⅰ式からⅡ式への変化は、表3・表4の主文と外区文様や鈕座内帯との相関からみると、細線式と併行する方向ではない。すなわち浮彫Ⅱ式の主文b・cは四神の一部欠落と四神の消失という点で細線式のそれと共通するものの、四神に替わるものとして西王母という神格が出現したものがある点で図像の意味するところが大きく相違するのである。西王母の出現は獸帯鏡がそれまでとは違う世界に変容し、画像鏡により接近したことを意味しており、実際に浮彫Ⅱ式獸帯鏡には画像鏡と区別をつけ難いものが存在するが、その弁別は今後の課題としておこう。

議論をもとに戻して、次に外区文様と主文を基準に分類した型式と系列変化のみられなかったほかの単位文様との相関を検討しよう。鈕座と乳、銘文について単位別の文様の出現頻度をとり、型式順の変遷をみたのが図7である。鈕座内帯については、細線式に強い相関が認められ、乳帯

	鈕 座 内 帯 乳帯文 盤龍文 なし	乳 の 個 数				乳 の 文 様 連 葉 幅 円	銘 文 の 種 類				銘 文 の 句 数				
		7	6	5	4		K	L	P	ほか	≥6	5・4	3・2	0	
細線式	IV A														
	IV B														
	IV C														
	V														
	VI														
	浮 I														
浮彫式	II														
	III														
	III														

図7 獣帯鏡の鈕座と乳と銘文の型式別出現頻度

文や盤龍文などの広い文様帯が漸移的に省略されていくけれども、浮彫式では乳帯文がⅡ式で逆に増加している。乳の個数は主文の数にはほぼ一致し、細線式と浮彫式ともに7個のものから次第に減少する方向が認められる。ただし6個の乳の例が細線ⅣC式の部分で不連続になっているのは、その資料数が7点と少ないためと思われる。乳の文様は連弧文、四葉文、輻射文が細線ⅣA・ⅣB式と浮彫Ⅰ・Ⅱ式に存在するが、細線ⅣC・Ⅴ・Ⅵ式と浮彫Ⅲ式ではすべて円座になっている。銘文は次第に句数が減少していることがわかる。

獣帯鏡にも面径の縮小化が確かめられ、型式別の出現頻度をみたのが図8である。細線ⅣB・Ⅳ

C式は資料数が少ないわりにばらつきが大きい、全体として次第に小型化する傾向にあり、細線Ⅵ式と浮彫Ⅲ式ではほとんど10cm以下になっている。しかし浮彫Ⅰ式と浮彫Ⅱ式との差はわずかで、浮彫Ⅱ式と浮彫Ⅲ式の間が不連続であることに注意される。

断面形態については、方格規矩四神鏡と同じように、斜縁化の方向の変化が看取できる。図6にあげた断面形態の1（細線ⅣA式）は、すでに鏡面と縁端面との角度が鋭角になり、2（細線ⅣB式）では周縁の厚みが増すとともに鈕が大きくなっている。3（浮彫Ⅰ式）では周縁の外側が内側に比べて厚くなり、大型の鈕をもつ点、初期段階の画像鏡の断面形態に類似する。

④考察 獣帯鏡を主文の文様表現によって細線式と浮彫式に大別して分析をおこない、細線式は方格規矩四神鏡と比べて外区文様や乳の文様が多様で、銘文Lが多いことなどの異なる特徴もみられるけれども、予想どおり、それとはほぼ併行する一連の変遷が明らかとなった。いっぽうの浮彫式は、主文の文様表現からみると細線式より後出することが予想されるが、浮彫Ⅰ式は四

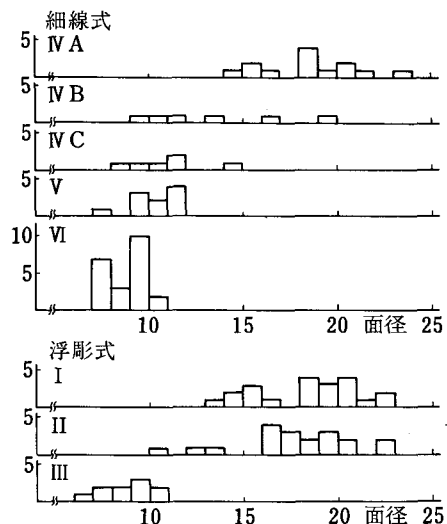


図8 獣帯鏡の面径

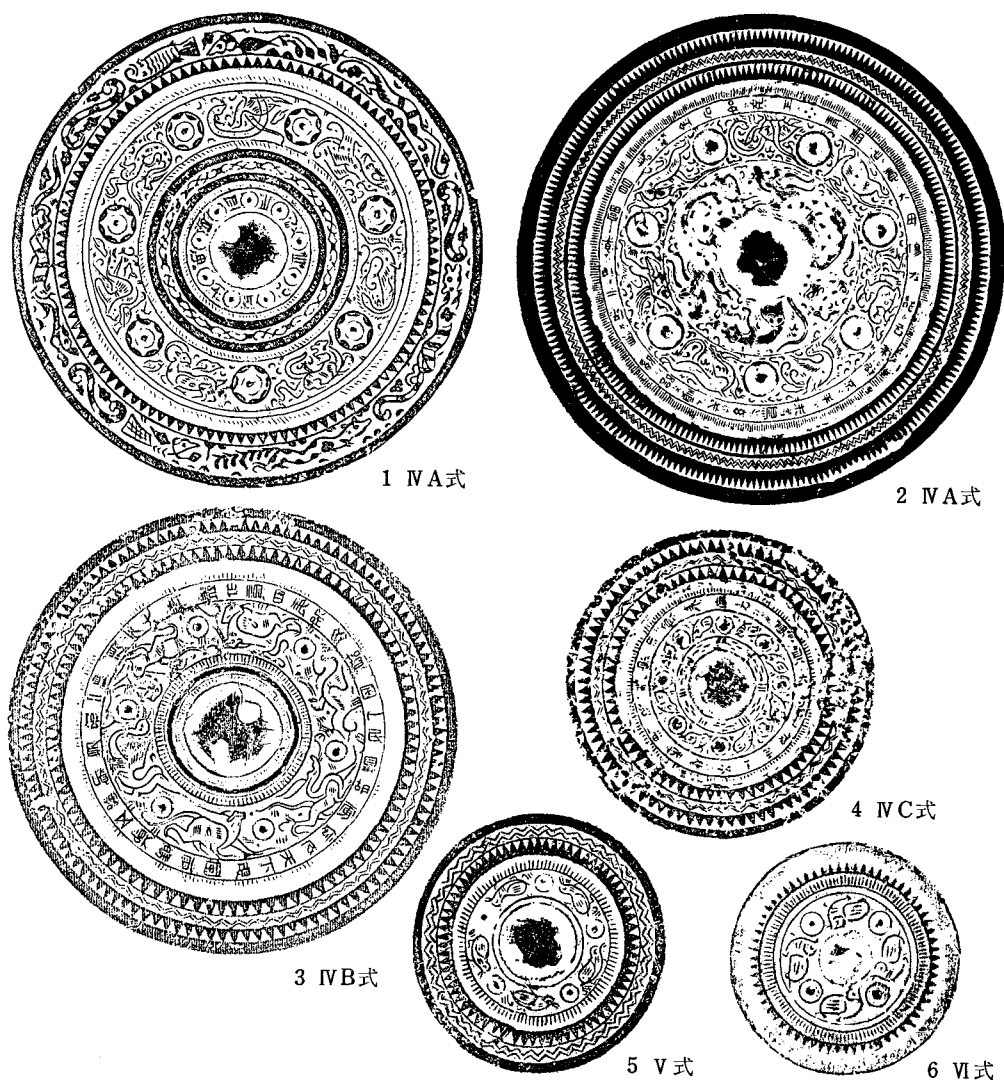


図9 細線式獣帯鏡の型式 (縮尺約1/3)

神を中心とする瑞獣で構成される主文 a, 画 1 など二重の文様帯からなる外区文様, 乳帯文や盤龍文などの鈕座文様をもち, 乳の個数, 銘文の句数などの比較から, 細線ⅣA式に類似した特徴をもつことがわかる。しかし浮彫Ⅰ式は外区文様がより多様で, 乳に四葉文が多く, さらに浮彫Ⅱ式になると四神の替わりに西王母をもつものが出現して画像鏡に接近することから, 浮彫Ⅰ式は細線ⅣA式から分岐し, 細線式とは別の方向に変化していったものと推測できる。ところが浮彫Ⅱ式からⅢ式へは連続的な変化とはとらえ難く, むしろ浮彫Ⅲ式は鳥文からなる主文 d, 鋸 c や鋸 d の外区文様をもち, 4 個の円座乳のもの, 銘文がないもの, 面径が 10cm 以下のものがほとんどであるという特徴は細線Ⅴ・Ⅵ式獣帯鏡と共通するから, その主文の浮彫化と理解できる。このように浮彫式は細線式から派生し, 併行して存在したものと考えられ, この系列関係を示したのが図11である。



紀年鏡が2面知られている。永平七年(AD64)鏡(梅原 1943 : Pl. 4) は細線ⅣA式、元 和三年<sup>(5)</sup>(AD86)鏡(広西 1978 : Pl. 123) は浮彫Ⅱ式に属している。これによって浮彫式が紀元後1世紀後半のなかで出現したと推測され、ひとまず細線ⅣA式を1世紀なかがろ、浮彫Ⅰ式とⅡ式を1世紀後半と考え、そのほかの型式については後章に検討しよう。

銘文の冒頭に記される作鏡者には「尚方」や「青盖」のほかに、「侯氏作」や「呂氏作」などの「某氏作」のものがある。型式別にみると、細線式獣帯鏡では約半数が「尚方」、次に「青盖」が多く、「某氏」が若干存在する。浮彫Ⅰ式では同じように約半数が「尚方」、ほか約半数が「某氏」で、「青盖」はない。浮彫Ⅱ式になると「尚方」がわずかとなり、ほとんどが「某氏」となる。ただし長沙から出土した浮彫Ⅱ式鏡には「青盖陳氏作」という銘文があり(湖南省 1960 : 80)、浮彫式では唯一の「青盖」の例であるが、作鏡者の氏名に「青盖」の名を冠したこの銘文によって、諸説に分かれていた「青盖」の意味が作鏡工房名あるいは商標名であることがわかる。鏡式と作鏡者との関係については後章に改めて検討したい。

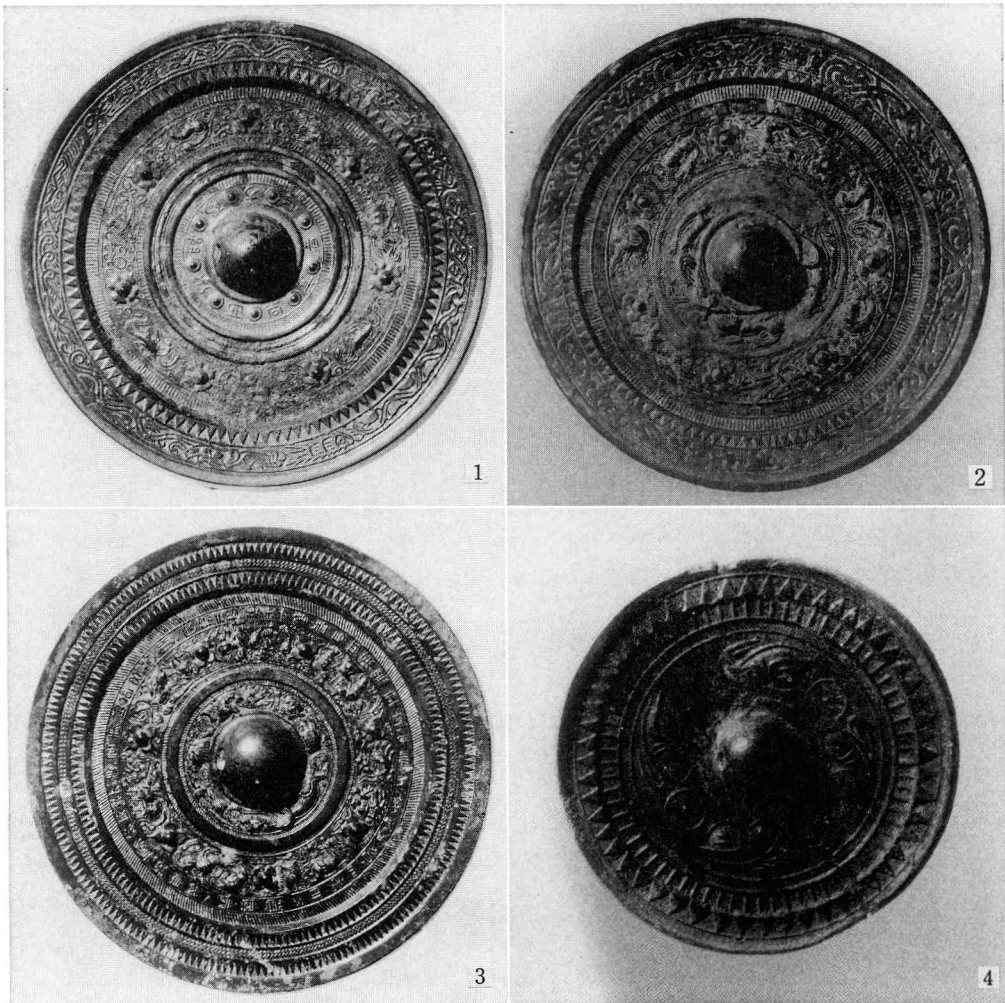


図10 浮彫式獣帯鏡の型式 (1 : Ⅰ式, 2・3 : Ⅱ式, 4 : Ⅲ式)

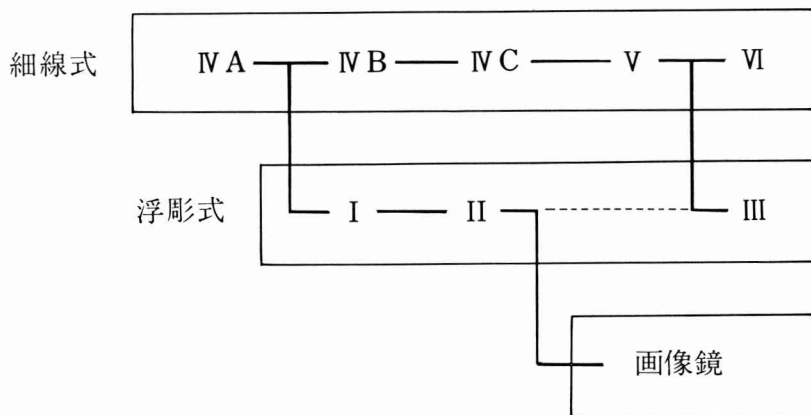


図11 獸帯鏡の系列

### (3) 盤 龍 鏡

鈕の下から浮彫表現の首や足をだした龍形や虎形を主文とし、富岡謙蔵が北周庾信の詩のなかの「盤龍明鏡」によって命名した鏡である(1920)。有角の龍形と無角の虎形で構成されるため、梁上椿のように龍虎鏡と呼ぶひともし少なくない(1941)。銘文からみると、その主文は辟邪、天禄と呼ばれた禽獣であるが(林 1978)、ここでは一般に通用している盤龍鏡の名称を用い、有角の獣を龍、無角の獣を虎として記述することにする。

盤龍鏡の先行研究はいたって少なく、後藤守一(1926)や樋口隆康(1979)は獣の頭数によって分類しているけれども、その目的と意味づけは明らかにされていない。『洛陽焼溝漢墓』は「三獣鏡」と呼んで後漢後期の第6期墓からの出土を報告し(洛陽区 1959)、主文が浮彫表現であることを理由に、一般には後漢後期のものと推測されている。しかし前節にみたように、細線IV A式獸帯鏡や元和三年浮彫II式獸帯鏡の鈕座に盤龍文が用いられているから、後漢前期の1世紀代に出現していたことは十分に予想されよう。

①単位文様の分析 文様単位には主文、銘文、外区文様があるのみで、方格規矩四神鏡や獸帯鏡に存在した鈕座や乳はほとんどない。日本から出土する三角縁神獸鏡の一種の三角縁盤龍鏡は

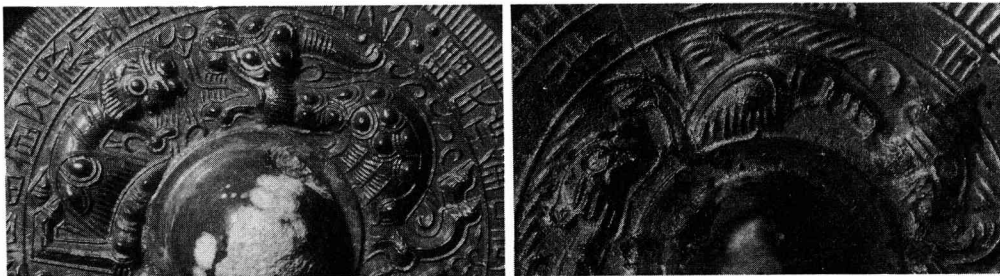
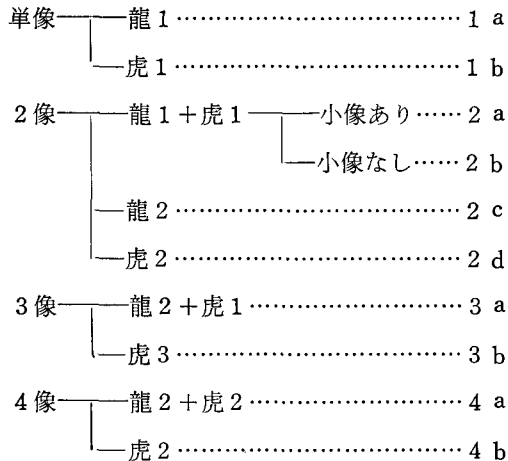


図12 盤龍鏡の主文表現

乳をもつ点でふつうの盤龍鏡と区別され、ここでは分析の対象とはしない。

主文は文様表現、龍と虎の数、配置を検討する。文様表現はほとんどが獣帯鏡にみたような輪郭線をもつ浮彫 a だが、輪郭線のない浮彫 b のもの、輪郭線がない浮彫で図像の上面が画像鏡のように平らなものがまれにある。龍と虎の数は樋口の分類(1979)を参考に次のように分ける。



配置は互いに頭を対向させたものがふつうで、3 a のばあいには龍と虎が対向し、鈕の反対側にもう 1 頭の龍を配しており、4 a のばあいには対向する龍と虎の組合せ 2 対を配置する。例は多くないが、複数の獣が対向せずに同じ向きとなるものが 2 b、2 c、2 d、3 b にある。このように主文の獣の組合せや配置は多様であり、変化の方向は見いだせない。しかし総じてみれば文様表現には精粗が看取され、龍と虎の区別が明確なものは精緻で(図12左)、その区別がなくなってすべて同形の犬状の虎になったものは粗い文様となっている(図12右)。かりに文様の退化を想定す

表 5 盤龍鏡の主文と外区文様の相関

	主 文								
	4 a	3 a	2 a	2 b	2 c	1 a	1 b	3 b	2 d
鋸 a	1	8	20	5	1			2	
外 *1	1	3	3	1	6	3			
区 *2	1		2	5	2	5			
文 鋸 b			1	3		1		1	
様 鋸 c		5	6	18	2	2	1	10	
鋸 d			1	2	1	2	1	4	7

外区文様 \*1: 唐 a 1, 唐 b 1, 画 1, \*2: 雲 2, 唐 a 2, 唐 b 2, 画 2, 鋸 a: 鋸 a 1, 鋸 a 2, 鋸 c: 鋸 c 1, 鋸 c 2

	銘文の種類					銘文の句数				
	K	L	N	P	Qほか	≥6	5・4	3・2	0	
IA										
IB										
IIA										
IIB										
III										

図13 盤龍鏡の銘文の型式別出現頻度

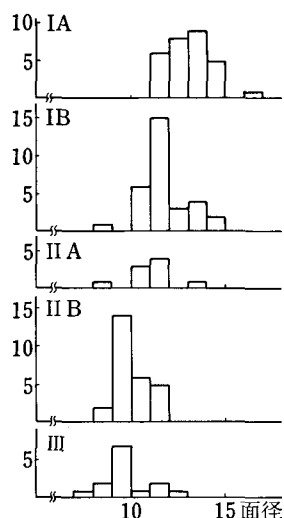


図14 盤龍鏡の面径

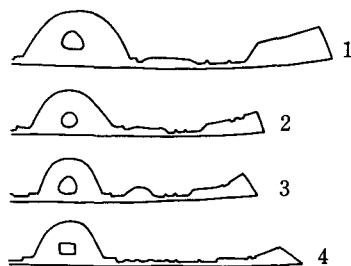


図15 盤龍鏡の断面形態 (縮尺1/2)

型式分類の有効な基準となっているから、盤龍鏡についても表5の相関によって外区文様を基準とし、主文をあわせた分類をおこなう。

I A式：外区文様が鋸a 1、鋸a 2、唐a 1、唐b 1、画1で、主文が2 a、3 a、4 aのもの。

I B式：外区文様が鋸a 1、鋸a 2、鋸b、雲2、唐a 1、唐a 2、唐b 2、画1、画2で、I A式以外のもの。

るならば、龍と虎を区別した2 a、2 b、2 c、3 a、4 aが古く、虎だけとなった2 d、3 b、4 bが新しいといえるだろう。

銘文は、方格規矩四神鏡でみたK、L、N、獸帯鏡でみたPのほかに

Q 某氏作鏡佳且好 明而日月世少有  
刻治今守悉皆左 長保二親宜孫子

があり、またいずれにも属さない特殊な銘文もある。ほとんどが七言句でその句数も検討する。

外区文様は獸帯鏡と共通し、多様である。方格規矩四神鏡の図1でみた鋸a 1、鋸a 2、鋸b、鋸c 1、鋸c 2、鋸d、雲2があり、また獸帯鏡の図6でみた唐a 1、唐a 2、唐b 1、唐b 2、画1、画2がある。いずれも文様帯の省略化の方向が想定できる。

②単位文様の相関 系列変化のたどれる単位文様には外区文様があり、もっとも重要な主文にも、変異の幅が大きく規則的な序列とはなっていないが、おおよその傾向が想定できた。そこでこの両者の相関をみたのが表5である。外区文様の鋸cと主文の2 a・3 aとの相関が強いことは期待に違っているけれども、全体として有意の相関が読み取れる。

③型式の設定 盤龍鏡は文様単位が比較的少なく、しかも主文に明瞭な系列変化が認められないため、編年を目的とした型式分類には一定の困難がある。しかし外区文様は方格規矩四神鏡や獸帯鏡と共通し、またそれはこの両鏡式の

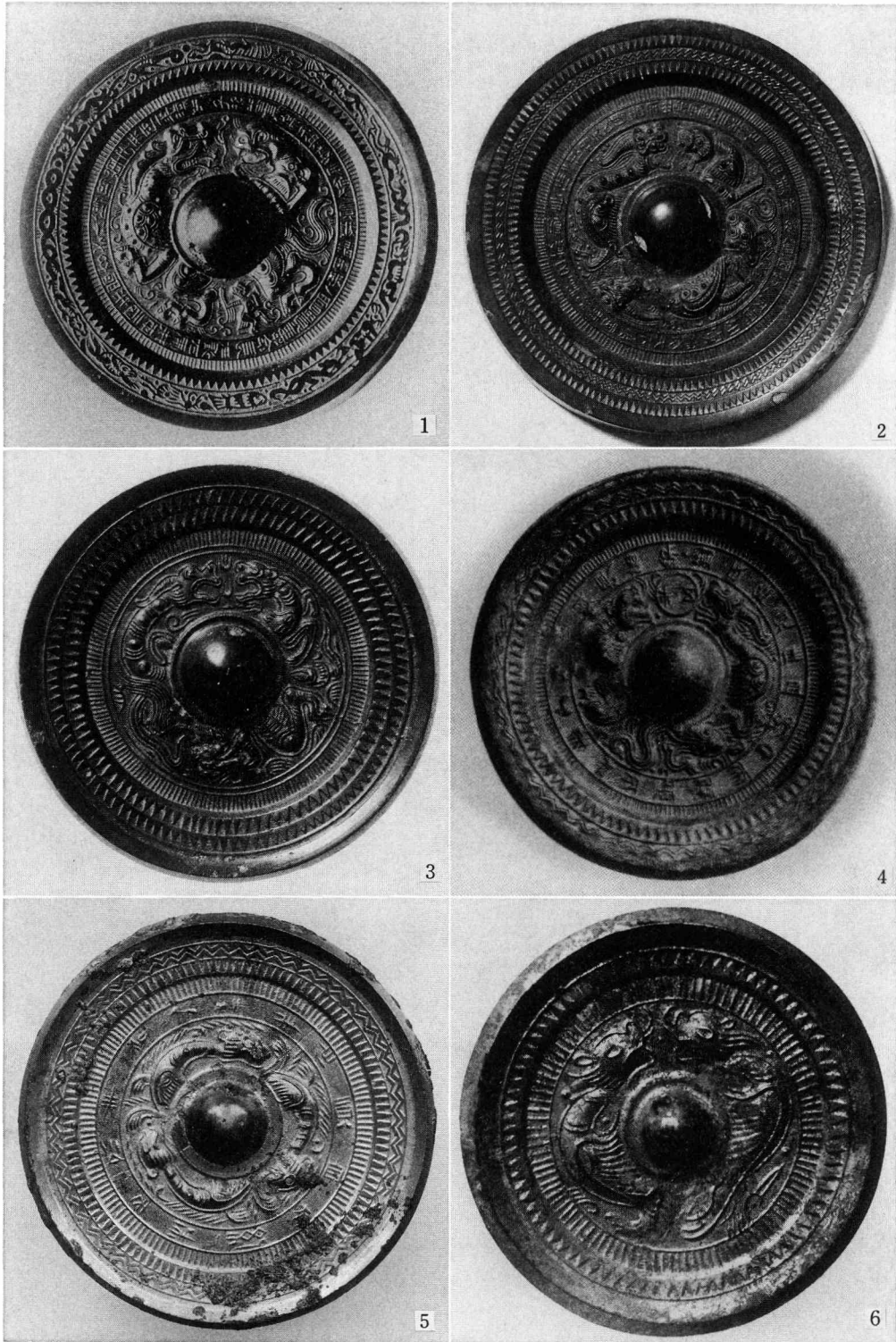


図16 盤龍鏡の型式

(1・2：ⅠA式，3：ⅠB式，4：ⅡA式，5：ⅡB式，6：Ⅲ式)

ⅡA式：外区文様が鋸cで、主文が2aまたは3aのもの。

ⅡB式：外区文様が鋸cで、主文が1a, 2b, 2c, 3bのもの。

Ⅲ式：外区文様が鋸dのもの。

この型式と銘文の種類や句数との相関の比率をみたのが図13である。ⅠA式にはすべてに銘文があり、5句前後の長銘であるのにたいして、ⅠB式では銘文のないものが半数あまりを占め、有銘のものでも句数が3句前後に減少し、Ⅲ式ではほとんど銘文のないものになっている。すなわち主文や外区文様の退化にともなって銘文の省略化が進んでいる。また銘文Nの頻度が高いことは方格規矩四神鏡や獣帯鏡と異なる特徴である。

型式別に盤龍鏡の面径の度数分布をみたのが図14である。ほかの鏡式に比べて小型でまとまりがあるが、全体として次第に小型化する傾向にあり、ⅡB式ではピークが10cm以下になっていることがわかる。

断面形態については、ほかの鏡式と同じように斜縁化の方向の変化が看取できる(図15)。1(ⅠA式)は、面径と比べて鈕が大きく、周縁が厚い。この周縁の厚みと主文の高い浮彫のために採拓に難儀したひともあるだろう。このⅠA式の段階で周縁の外側がやや厚くなり、斜縁化のきざしが現れていることに注意される。2(ⅠB式)は、周縁の厚みが減じるとともに斜縁化が進行し、3(ⅡB式)では鏡面と縁端面との角度が鋭角になり、周縁外側のみが突出して断面三角形になっている。4は同じⅡB式で、周縁の厚みがなくなったぶん、低い三角縁状になっている。

④考察 盤龍鏡は、外区文様帯の省略、龍と虎を区別した主文からすべて同形の犬状の虎になったものへの変化、面径の漸移的な縮小、周縁断面の斜縁化などの変化が連動し、全体として簡略化の方向に変遷したことが明らかになった。

盤龍鏡には紀年鏡がない。しかし盤龍鏡に多くみられる銘文Nの初句「某氏作鏡四夷服」の「四」を「三」と表記するものはないことから、王莽代にさかのぼる可能性は少ない。

銘文の冒頭に記される作鏡者は「青蓋」がもっとも多く、「某氏」がそれに次ぎ、「尚方」はごくわずかである。「青蓋」銘はほとんど外区が鋸歯文のもので、画像文のものはまれにしかない。浙江紹興出土のⅠA式鏡には「呉向里柏師作」、同じ浙江出土のⅠB式鏡には「上虞杜氏造」の銘文があり、いまの江蘇南部から浙江北部にあたる呉郡と会稽郡上虞の周辺に製作地のひとつがあったことがわかる。

#### (4) 鏡式間の併行関係

方格規矩四神鏡と獣帯鏡、盤龍鏡は瑞獣を主文とする鏡群であり、相互に単位文様を共有する関係にあった。いまそれを利用して鏡式間の併行関係を検討することにした。

この分析に有効な単位文様は、複数の鏡式に共有されているものに加えて、系列変化のあるもの、もしくはその用いられた型式が限定できるものである。系列変化の認められたものには型式分類の基準とした外区文様と主文とがあり、銘文の句数もまた有効と思われる。

表6 外区の鋸歯文と型式との相関

	鋸 a 1	鋸 a 2	鋸 b	鋸 c	鋸 d
方格規矩四神鏡	Ⅳ～Ⅴ C	Ⅴ B・Ⅴ C	Ⅴ B・Ⅴ C	Ⅵ	Ⅶ
細線式獸帶鏡	Ⅳ A～C	—	Ⅳ C	Ⅳ B～Ⅴ	Ⅵ
浮彫式獸帶鏡	Ⅰ・Ⅱ	—	—	Ⅲ	Ⅲ
盤 龍 鏡	Ⅰ A・B	Ⅰ A・B	Ⅰ B	Ⅱ A・B	Ⅲ

①外区文様 鋸歯文は方格規矩四神鏡や細線式獸帶鏡、盤龍鏡の外区文様のほとんどを占め、三重の文様帯からなる鋸 a から二重の鋸 b・鋸 c、単圏の鋸 d へという文様帯の省略による変化が想定されたために型式分類の基準のひとつとしたものであるから、併行関係を検討する有効な単位文様となりうる。これと型式との関係を整理したのが表6である。

そのほかの外区文様では、雲1が方格規矩四神鏡Ⅳ～Ⅴ B式と細線Ⅳ A式獸帶鏡、浮彫Ⅰ式獸帶鏡にみえる。いっぽうの画1や唐 a 1などは方格規矩四神鏡にはないものの、細線Ⅳ A・Ⅳ B式獸帶鏡や浮彫Ⅰ・Ⅱ式獸帶鏡、盤龍鏡Ⅰ A・Ⅰ B式にあり、その後には画像鏡にも用いられ、雲1より後出すると考えられる。これらは鋸歯文ほど安定した単位文様とはいえないが、表6にみた鋸歯文と型式との対応関係に矛盾するものではない。

②主文 方格規矩四神鏡と細線式獸帶鏡の主文は表現や構成が共通し、四神をもつ構成から鳥文への変化が想定され、型式分類のひとつの基準とした。これを改めて整理すると、四神が完全なものは方格規矩四神鏡Ⅳ・Ⅴ A式と細線Ⅳ A式に、四神の一部が欠落してほかの禽獣に置き換わったものは方格規矩四神鏡Ⅴ B式と細線Ⅳ B式に、鳥文だけで構成されるものは方格規矩四神鏡Ⅴ C～Ⅶ式と細線Ⅳ C～Ⅵ式獸帶鏡に用いられている。主文構成による浮彫式獸帶鏡と細線式獸帶鏡との関係はすでに検討した。

盤龍鏡の主文は獸帶鏡の鈕座文様としても用いられ、細線式獸帶鏡には盤龍鏡の主文2 a, 3 a, 4 aが、浮彫式獸帶鏡にはそのほかに1 aが存在する。これだけでは盤龍鏡と獸帶鏡の併行関係を細かく決めることはできないが、両者の緊密な関係をうかがうことができる。

③銘文 方格規矩四神鏡には銘文K、細線式獸帶鏡には銘文L、盤龍鏡には銘文Nが多く、いずれも七言句という点では共通している。型式ごとに銘文の句数の平均をみると、方格規矩四神鏡Ⅳ式は6句と多く、次いで細線Ⅳ A式獸帶鏡と盤龍鏡Ⅰ A式が5句弱、方格規矩四神鏡Ⅴ A式が4句弱、方格規矩四神鏡Ⅴ B式と浮彫Ⅰ・Ⅱ式獸帶鏡が3句前後、方格規矩四神鏡Ⅴ C式と細線Ⅳ B・Ⅴ式獸帶鏡、盤龍鏡Ⅱ A式が2句前後、方格規矩四神鏡Ⅵ・Ⅶ式と細線Ⅵ式獸帶鏡、浮彫Ⅲ式獸帶鏡、盤龍鏡Ⅱ B・Ⅲ式は銘文をほとんどたない、という結果がえられ、いずれの鏡式も併行しながら句数が減少していく傾向が確かめられた。この統計的な結果は単位文様から導かれる鏡式間の併行関係と矛盾せず、ある程度の有効性をもっている。

このほかに断面形にも鏡式間に併行する斜縁化の方向が確かめられたが、断面形の類別がいま

だ不十分なため型式との対応が決められてはいない。しかし方格規矩四神鏡ⅤA式や細線ⅣA式獸帯鏡、盤龍鏡ⅠA式の段階で斜縁化の第一歩がはじまったことは注意すべきであろう。

単位文様の変化の速度は不均等であり、たとえば方格規矩四神鏡や細線式獸帯鏡では外区文様の鋸aの存続範囲内に主文が四神のものから鳥文へと変化しているが、以上の外区文様と主文の共有関係から各型式の妥当な併行関係を導くならば、

方格規矩四神鏡	Ⅳ	ⅤA	ⅤB	ⅤC	Ⅵ	Ⅶ
細線式獸帯鏡		ⅣA	ⅣB	ⅣC	Ⅴ	Ⅵ
浮彫式獸帯鏡			Ⅰ	Ⅱ		Ⅲ
盤龍鏡		ⅠA	ⅠB		ⅡA	ⅡB Ⅲ

となるであろう。そして紀年銘などによって、方格規矩四神鏡Ⅳ式が王莽代、同ⅤA式が後漢初頭に位置づけられ、細線ⅣA式獸帯鏡が64年、浮彫Ⅱ式獸帯鏡が86年に一点が与えられるから、この前半部分は実年代のうえでも大きな矛盾がないと思われる。しかしその後半部分の検証と実年代の決定は、出土遺構からの分析を待たねばならない。

### 3. 内行花文鏡

内行花文鏡とは、内向する半円弧を連ねた連弧文を主文とし、前漢代の連弧文銘帯鏡の銘帯が雲雷文(斜角雷文)帯に交替することによって成立した鏡である。前章の動物文鏡群とは同時期に併行するにもかかわらず、単位文様の共有関係がほとんどないため、ここに独立した章をたてて分析することにした。内行花文鏡の名称は中国語にはなじまないが、すでに学術用語として定着した感がある。

#### (1) 研究史

内行花文鏡は日本の遺跡からも多数出土し、幾何学的で単純な文様構成であるため比較的取り組みやすいこともあり、研究の蓄積がある。

内行花文鏡の鈕座には四葉座、蝙蝠座、円座の3種があり、これを基準に分類されてきた(後藤 1926, 山本 1978, 樋口 1979)。このうち四葉座と蝙蝠座との関係について『洛陽焼溝漢墓』は、四葉文から蝙蝠文への系列変化を想定したうえで、これを墓室や陶器の編年に照らして検証し、雲雷文をもつ四葉座内行花文鏡が焼溝5期、蝙蝠座内行花文鏡がおもに焼溝6期に編年されるとしている(洛陽区 1959)。四葉文から蝙蝠文への系列変化は疑問であるが、四葉座と蝙蝠座との前後関係は十分に認められよう。

後藤守一はまた、雲雷文が複雑なものから簡単なものへと変化したことを推測し(1926)、これを承けて小林三郎は雲雷文の簡略化が連弧間文様における結目状文と山形文との組合せのものから銘文のものへの変化と相関していることをあげ、雲雷文をもつ四葉座内行花文鏡を2型式に細



分した(1959)。最近では高橋徹が雲雷文と連弧間文様の変化から4型式に細分し(1986)、雲雷文をもつ四葉座内行花文鏡の型式分類は大いに進展した。しかし高橋論文は一連の文様変化を示す少数の資料だけを典型的に配列したきらいがあって、たとえば小林のあげた連弧間に銘文をもつものには触れられず、型式学的な操作に問題がある。さらに雲雷文をもつ四葉座内行花文鏡が2世紀中ごろまで存続するという年代観は、『洛陽燒溝漢墓』編年を歪曲したものであり、蝙蝠座内行花文鏡の位置づけとも齟齬をきたすものである。内行花文鏡の編年には、雲雷文をもつ四葉座のもののほかに、蝙蝠座、円座のものも併せて分析する必要がある。

この点で樋口隆康が鈕座を四葉座、蝙蝠座、円座の3種に、内区外周の文様帯を雲雷文、櫛目文、素文の3種に、連弧文と鈕座との間が櫛齒文を有する圈帯のもの、圈帯だけのもの、圈線のもの、ないものの4種に分け、相互の相関から型式を設定している(1979)のは 妥当な方法である。ただしその分類は編年を目的としたものではないため、従来の研究で着目されてきた雲雷文や連弧間文様の変化は検討されていない。また1例しか存在しない特殊な型式があり、型式の安定性も問題となろう。

## (2) 単位文様の分析 (図17)

内行花文鏡の文様単位には鈕座、鈕座の銘文、鈕座と連弧文の間にある圈帯、連弧文、連弧間

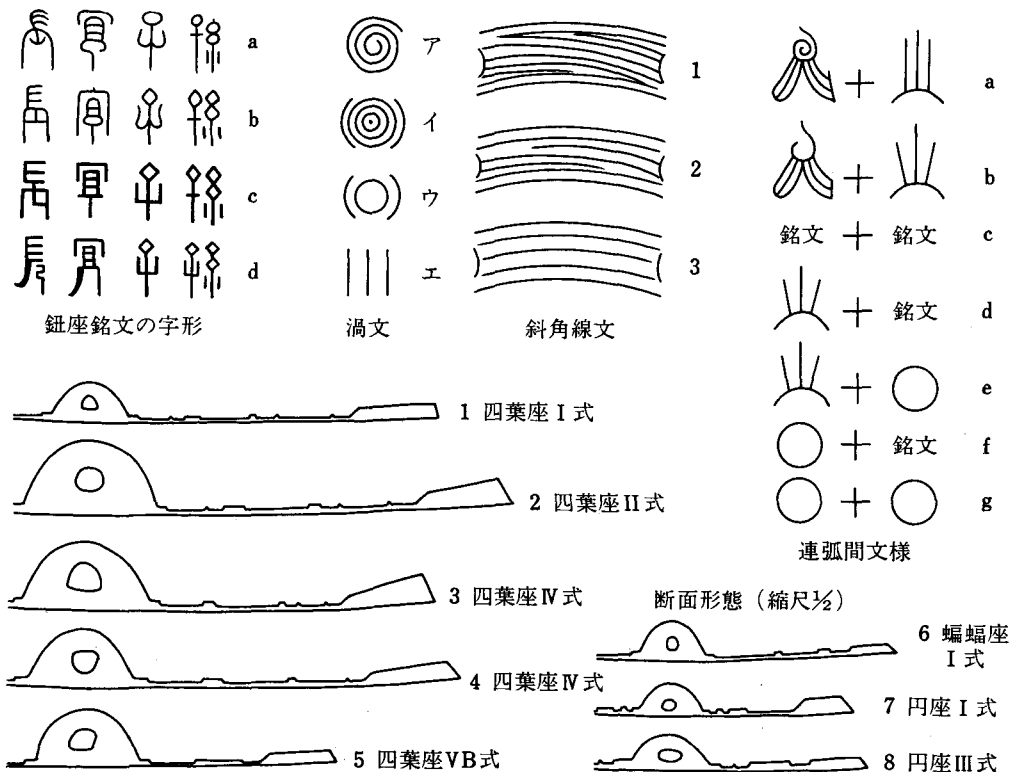


図17 内行花文鏡の単位文様

文様、雲雷文帯、外区がある。

鈕座は、四葉文座、蝙蝠文座、円座に分ける。高橋徹は四葉文の扁平化を想定した細かい分類を呈示しているが(1986)、それは疑問である。むしろ扁平な四葉文 a から宝珠形の四葉文 b、基部の削り込みがない蝙蝠形の四葉文 c への逆の変化を考えるべきであろう。

鈕座の四葉文や蝙蝠文の弁間には「長宜子孫」(銘文 a)、「長生宜子」(銘文 b)、「君宜高官」(銘文 c)、「位至三公」(銘文 d)などの四字句がある。円座には銘文はない。いっぽう銘文の字形には、丸みを帯びたいわゆる懸針体のもの(a)から、それが少し角張り、たとえば「子」や「孫」字の「口」部が円形から菱形に変わったもの(b)、さらに直線的な字面の四角い字形になったもの(c)、字画の一部が外反りの刀形に肥厚した装飾的な字形になったもの(d)への系列変化が想定される。

鈕座と連弧文の間にある圈帯は、樋口隆康の分類(1979)にしたがい、圈帯とその内側に櫛歯文をもつもの(a)、圈帯のみのもの(b)、圈線になったもの(c)、なにもないものに分け、この順の省略過程を想定する。

連弧文は8弧のものがふつうだが、円座内行花文鏡には7弧や6弧のものがある。

連弧間文様には、いわゆる結目状文や山形文、円文、銘文などがあり、このうちの2種類の文様を交互に配列している。結目状文と山形文との組合せは前漢代の連弧文銘帯鏡から存在し、整ったもの(a)からくずれたもの(b)への変化が想定できる。四字句の銘文を2句組み合わせたもの(c)では「寿如金石 佳且好兮」がもっとも多い。このほか、くずれた山形文と「寿如金石」などの銘文との組合せ(d)、くずれた山形文と円文との組合せ(e)、円文と銘文との組合せ(f)、すべて円文のもの(g)、そのほかの組合せ(h)、文様のないもの、に分けることができる。連弧間文様の組合せはこのように多様であり、このなかでは a → b の変化のみが想定できる。

雲雷文帯は従来より着目されてきた単位文様であるが、さらに渦文と斜角線文と櫛歯文に分解できる。渦文は渦巻状のもの(ア)から中心に点のある3重以上の同心円(イ)、そして二重以下の同心円(ウ)、短い平行線(エ)に転換し、最後にそれが消失したものへという簡略化が想定できる。斜角線文は多条の細線を打ち違えたもの(1)から線条が簡素になり(2)、平行線に転換し(3)、

最後にそれがなくなったものへという変化が想定できる。櫛歯文はやや斜めに傾いて細かく密なものから直で粗いものへと変化したと考えられる。しかし櫛歯文の区分は現状では感覚的にしかなしえず、ここでは明瞭に判別できる渦文と斜角線文との相関をみることによって雲雷文を分類することにしたい。表7の相関によって、ア1・ア2のものを雲雷文 a、イ1・イ2のものを雲雷文 b、ウ2のものを雲雷文 c、ウ3・エ3のものを雲雷文 d、渦文ウと斜角線文のないものある

表7 雲雷文の渦文と斜角線文との相関

		渦 文				
		ア	イ	ウ	エ	なし
斜	1	40	6			
角	2	2	8	36		
線	3			34	4	9
文	なし			4		145

いは渦文がなく斜角線文3のものを雲雷文e, および文様のない素文凹帯に分ける。そして雲雷文はa→b→c→d→eという省略化の方向を想定する。なお、雲雷文a・bは傾斜した細かい櫛歯文をもち、雲雷文c・d・eは直な粗い櫛歯文となる傾向がある。

外区はほとんどが幅広い素文である。しかし、ごくわずかに前章でみた鋸歯文a 1, 鋸歯文d, 唐草文b 1が存在する。

### (3) 単位文様の相関

系列変化の想定できた単位文様に、鈕座の銘文の字形、圈帯、雲雷文の3種がある。このなかで雲雷文はもっとも細かく区分され、まずこれとの相関関係を検討しよう。

表8は雲雷文と圈帯との相関をみたもの、表9は雲雷文と銘文の字形との相関をみたもので、いずれも強い正の相関が確かめられる。これによってそれぞれの変化の方向が期待通りに一致していることが明らかになった。

連弧間文様には系列変化の想定できるものはほとんどないが、前後関係を推測する意見があるので、その是非を確かめるため系列変化の認められた雲雷文との相関を検討しておこう。表10のように、連弧間文様のないものが雲雷文のいずれとも相関していることをのぞけば、aからhの順に雲雷文の変化と対応している。しかも結目状文と山形文との組合せ(a・b)が古く、次いで銘文だけのもの(c)が現れ、さらに結目状文が脱落して山形文と銘文(d)もしくは円文との組合せ(e)となり、円文は比較的后出することがわかる。このように連弧間文様にも組合せの変化があることが判明した。

表8 雲雷文と圈帯との相関

		雲 雷 文				
		a	b	c	d	e なし
圈 帯	a	35	13	17	6	
	b	7	1	19	22	8 68
	c				1	17
	なし				4	5 55

表9 雲雷文と銘文の字形との相関

		雲 雷 文				
		a	b	c	d	e なし
銘 文 字 形	a	34	9	8		
	b	3	5	13	10	
	c			6	7	3 60
	d					55

表10 連弧間文様と雲雷文との相関

		連 弧 間 文 様							
		a	b	c	d	e	f	g	h なし
雲 雷 文	a	36	2						4
	b	5	1	5					1
	c	1	2	10	11	5		2	5
	d		4	5	1	5	1	2	18
	e					2		4	7
	なし			6			10	3 10	110

	銘文の種類					銘文の字形				連弧間文様								
	a	b	c	d	ほか	a	b	c	d	a	b	c	d	e	f	g	h	なし
四葉座	I																	
	II																	
	III																	
	IV																	
	VA																	
	VB																	
蝙蝠座	I																	
	II																	
円座	I																	
	II																	
	III																	

図18 内行花文鏡の銘文と連弧間文様の型式別出現頻度

#### (4) 型式の設定

研究史にみたように、鈕座による四葉座、蝙蝠座、円座の分類がすでに通用し、編年のうえでも有意の分類となっているから、まずこれを鏡式に準じた扱いをおこない、四葉座内行花文鏡、蝙蝠座内行花文鏡、円座内行花文鏡と大別する。そしてそれぞれを系列変化の確かめられた雲雷文と圈帯とを基準に型式分類をおこなうことにする。

四葉座Ⅰ式：雲雷文aで、圈帯aのもの。

四葉座Ⅱ式：雲雷文a・圈帯bまたは雲雷文b・圈帯aのもの。

四葉座Ⅲ式：雲雷文cのもの。圈帯はaまたはb。

四葉座Ⅳ式：雲雷文dまたはeのもの。圈帯はaまたはb。

四葉座ⅤA式：雲雷文がなく、圈帯bまたはcのもの。

四葉座ⅤB式：雲雷文がなく、圈帯もないもの。

蝙蝠座Ⅰ式：雲雷文がなく、圈帯bをもつもの。

蝙蝠座Ⅱ式：雲雷文がなく、圈帯もないもの。

円座Ⅰ式：雲雷文cで、圈帯bのもの。

円座Ⅱ式：雲雷文dまたはeで、圈帯bまたはないもの。

円座Ⅲ式：雲雷文がなく、圈帯cまたはないもの。

要するに、四葉座Ⅰ～Ⅳ式と円座Ⅰ・Ⅱ式に雲雷文があり、四葉座ⅤA・ⅤB式と蝙蝠座のすべて、および円座Ⅲ式には雲雷文がない。また圈帯aは四葉座Ⅰ～Ⅳ式にあり、圈帯bは四葉座

Ⅱ～ⅤA式と蝙蝠座Ⅰ式、円座Ⅰ・Ⅱ式に、圈帯cは四葉座ⅤA式と円座Ⅲ式に、圈帯のないものが四葉座ⅤB式と蝙蝠座Ⅱ式、円座Ⅱ・Ⅲ式に存在する。なお、鈕座の四葉文aは四葉座内行花文鏡のⅠ～ⅤB式まで存在し、四葉文bとcはⅤA・ⅤB式に存在する。

このように設定した型式とはほかの単位文様との相関を検討しよう。鈕座の銘文の種類、字形、連弧間文様について出現頻度を型式別にみたのが図18である。銘文の種類はaとした「長宜子孫」が次第に減少する傾向にあるけれども、もっとも少ない四葉座ⅤB式でも過半を占める中心的な銘文となっている。

銘文の字形は系列変化を追うことができたため、期待通りの結果があらわれた。四葉座Ⅰ式ではすべてが懸針体の字形aで、四葉座Ⅲ式まで減少しながら続いている。交替に字形bが四葉座Ⅱ式で出現し、次第に増加しながら四葉座Ⅳ式まで続いている。角ばった字形cは四葉座Ⅲ式に出現して四葉座ⅤB式

にいたり、蝙蝠座Ⅰ・Ⅱ式にも存続している。字形cを装飾的にした字形dは蝙蝠座Ⅰ・Ⅱ式的主流であるが、四葉座ⅤA式にも存在している。

四葉座Ⅰ式の連弧間文様はすべてが結目状文と山形文との組合せのaであり、四葉座Ⅱ式にその退化形態のbが出現して四葉座Ⅳ式まで存続している。山形文は銘文や円文とも組合わさる(d, e)が、それは四葉座Ⅲ・Ⅳ式に存在する。したがって結目状文と山形文とは、どのような組合せにせよ、四葉座Ⅳ式までであり、四葉座Ⅴ式や蝙蝠座のものには続かないことがわかる。いっぽう銘文からなるcは四葉座Ⅱ式に出現し、四葉座ⅤA式までと蝙蝠座Ⅰ式、円座Ⅰ式に用いられている。また円文は四葉座Ⅲ式に出現し、四葉座ⅤA式までと蝙蝠座Ⅰ式、円座Ⅰ・Ⅱ式に存在する。要するに、連弧間文様は結目状文と山形文を基本に、後れて銘文や円文のものが加わり、四葉座Ⅲ・Ⅳ式の段階でもっとも多様化し、漸移的に文様のないものへと置換していったのである。

型式別の面径の度数分布をみたのが図19である。ほかの鏡式と比べてばらつきが大きく、たとえば四葉座Ⅲ式では20cmを越えるものと15cm以下のものとに大小分かれている。しかし全体としては四葉座Ⅰ式からⅤ式へ、そして蝙蝠座、円座へと順次縮小していく傾向が確かめられる。

断面形態にも特徴的な変化が現れている(図17)。1の四葉座Ⅰ式では、鈕が比較的小さく、周縁の内側と外側の厚さはほぼ同じである。2の四葉座Ⅱ式になると、鈕が大型化し、鏡面と縁端

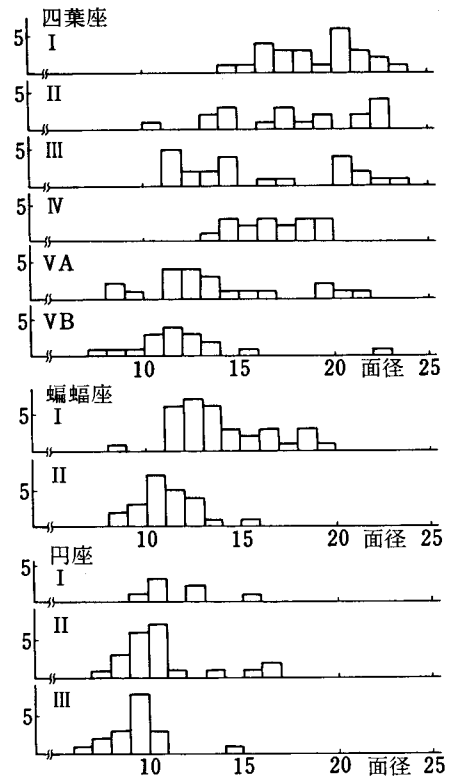


図19 内行花文鏡の面径

面との角度が鋭角になるとともに周縁の外側が内側よりずいぶん厚くなり、3の四葉座Ⅳ式まで続いている。しかし同じ四葉座Ⅳ式でも4のような周縁がほぼ均等な厚みのものも現れ、5の四葉座ⅤB式や6の蝙蝠座Ⅰ式のようにその形態が継承されていく。ただし周縁の厚みが均等に帰ったとはいえ、鏡面と縁端面との角度は鋭角なままで、鈕が大きい特徴は四葉座Ⅰ式と明確に区別できる。円座のものもほぼ同じ変化を示し、雲雷文○をもつ7の円座Ⅰ式では面径に比べて周

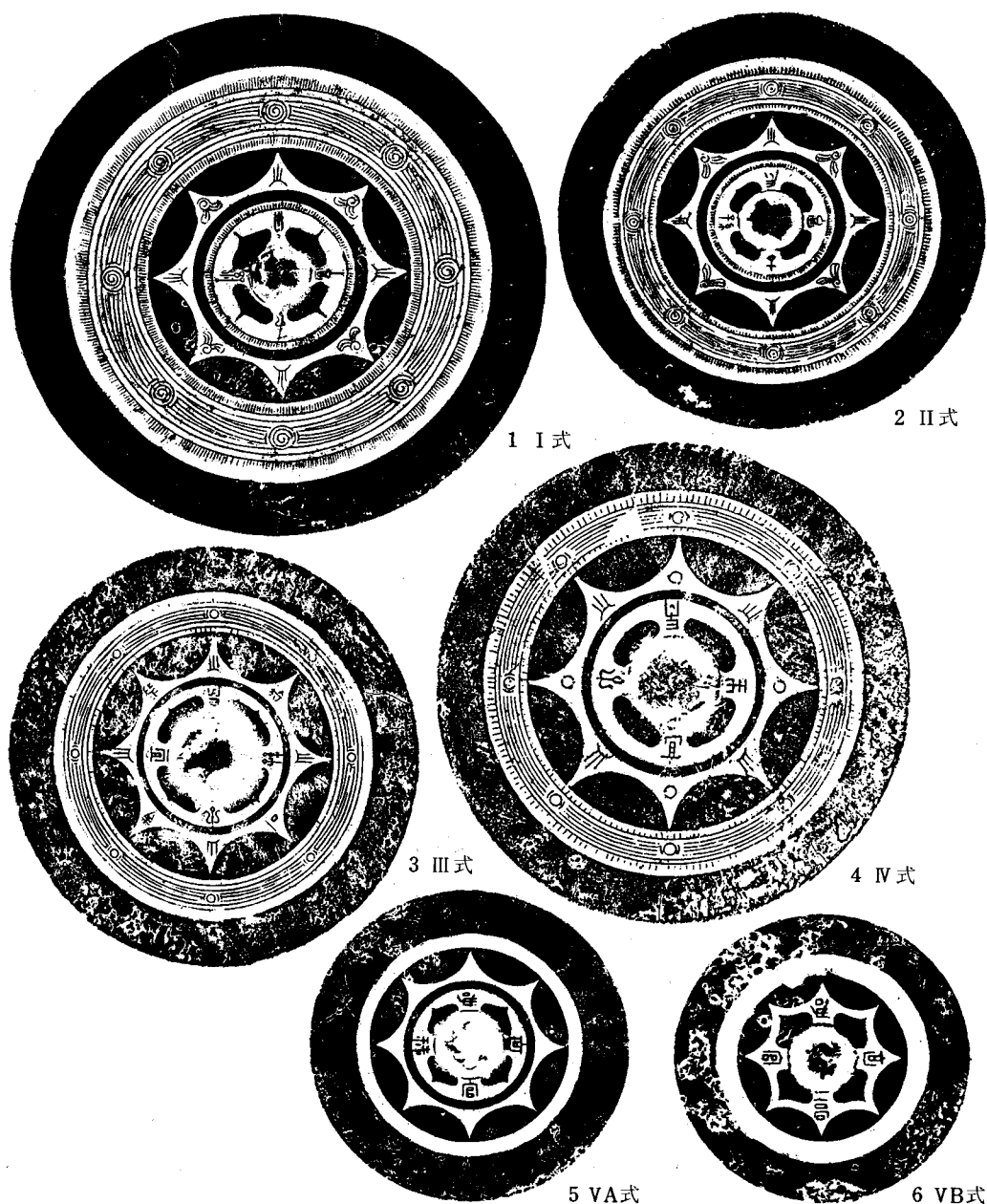


図20 四葉座内行花文鏡の型式 (縮尺約1/3)

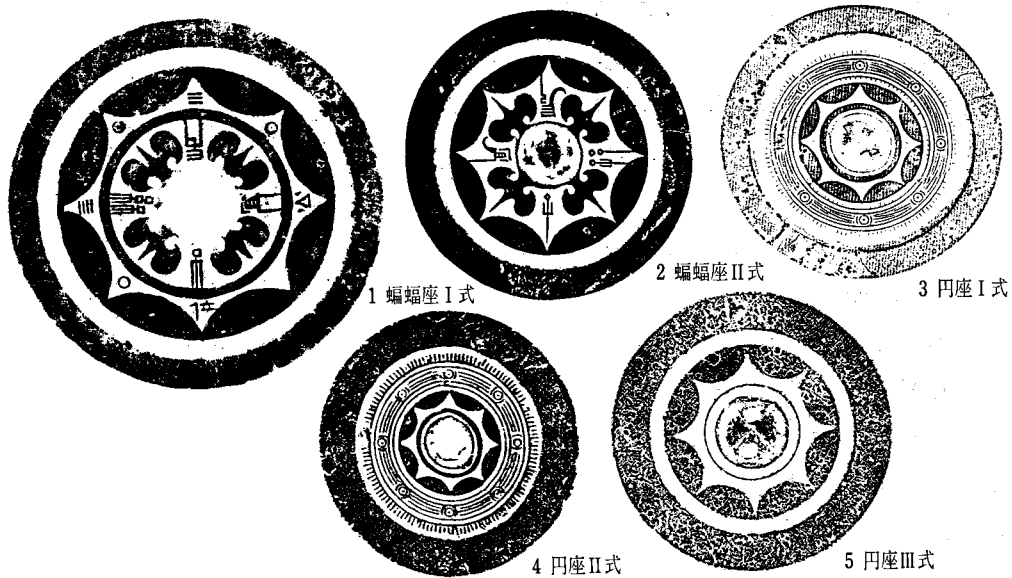


図21 蝙蝠座・円座内行花文鏡の型式（縮尺約1/3）

縁が厚く、鏡面と縁端面との角度が鋭角となり、2や3に近い形態である。しかし雲雷文帯が素文凹帯となった8の円座Ⅲ式ではほぼ均等な厚みの周縁に変化している。このような四葉座Ⅰ式からⅣ式や円座Ⅰ式までの断面形態の変化は動物文鏡群にみた斜縁化の動きと同調するものであるが、雲雷文が素文凹帯となった四葉座Ⅴ式や蝙蝠座、円座Ⅲ式などでは平らな周縁に逆戻りする独自の变化になっている。

### （5） 考 察

先行研究にしたがって鈕座をもとに内行花文鏡を四葉座、蝙蝠座、円座に分け、それぞれを雲雷文と圈帯とを基準に型式分類をおこなった。そして単位文様の分析によって四葉座はⅠ式からⅤB式へ、蝙蝠座はⅠ式からⅡ式へ、円座はⅠ式からⅢ式へと順に変遷したことが認められた。次にその時間的関係を検討しよう。

『洛陽焼溝漢墓』（洛陽区 1959）によって四葉座→蝙蝠座の関係が確かめられているが、細分した型式をもとに再検討するならば、四葉座Ⅴ式と蝙蝠座とはともに内区外周に素文凹帯をもち、併行する可能性がまず考えられる。そして銘文の字形、連弧間文様、面径、断面形態などからみると、蝙蝠座Ⅰ式は四葉座Ⅳ式に先行する可能性はほとんどなく、これらの特徴および圈帯の有無によって、四葉座ⅤA式と蝙蝠座Ⅰ式、四葉座ⅤB式と蝙蝠座Ⅱ式が併行するものと考えられる。いっぽう円座内行花文鏡は、小型化の必要のために雲雷文帯内側の櫛歯文が省略されることがふつうだが、円座Ⅰ式は雲雷文cをもつことから四葉座Ⅲ式と、円座Ⅱ式は雲雷文dによって四葉座Ⅳ式と、円座Ⅲ式は素文凹帯によって四葉座Ⅴ式とそれぞれ併行すると考えられる。この併行関係は連弧間文様や断面形態からも追認できる。したがってこれらの関係を整理すれば、

四葉座 I II III IV VA VB

蝙蝠座 I II

円座 I II III

となるだろう。

永平七(AD64)年の紀年鏡が知られている(梅原 1943: Pl. 3)。四葉座に「宜三百竟」という特殊な銘文をいれ、雲雷文帯に「永平七年正月作」「公孫家作竟」という銘文をいれたのは異例だが、四葉座、圈帯b、連弧間文様b、雲雷文cをもつことから四葉座Ⅲ式に分類できる。また断面形態も問題ない。したがって四葉座Ⅲ式の年代の一点が永平七年にあることになるが、それはまた細線ⅣA式獣帯鏡に属する紀年鏡と同年であるため、動物文鏡群の編年と部分的につながることができる。

内行花文鏡は前漢代の連弧文銘帯鏡の銘帯が雲雷文帯に交替することによって成立したものであり、連弧文銘帯鏡の終末は居摂元(AD6)年鏡によって後1世紀初頭に定められるから(岡村 1984)、四葉座Ⅰ式内行花文鏡の出現はそれをさかのぼらないと考えられる。次章に検討するように、遺跡出土例からみて内行花文鏡は王莽代に出現した可能性が強く、かりにそれを認めるならば、連弧文銘帯鏡から内行花文鏡へは間断なく連続的に変化したものであり、四葉座Ⅰ式内行花文鏡は王莽代の方格規矩四神鏡Ⅳ式と併行するものと想定できる。

内行花文鏡は動物文鏡群とは単位文様をほとんど共有しないけれども、わずかながら四葉座Ⅲ式の外区文様には動物文鏡群と共通する鋸歯文aと唐草文b1があり、円座Ⅲ式には鋸歯文dがある。これとさきに想定した併行関係によって、動物文鏡群の編年との対応をおおよそ推測することができよう。

#### 4. 後漢墓による検証と実年代の比定

動物文鏡群と内行花文鏡について、単位文様による型式分類と鏡式間の併行関係を検討し、紀年鏡によって一部の型式に実年代を与えた。そこでこの相対編年を検証するために、後漢墓における鏡どうしの共伴関係を検討してみよう(表11)。前漢後期から夫婦合葬墓が普遍化し、後漢代になると世代を越えた3体以上の埋葬が現れるようになるため、異なる時期の鏡が共伴する例が少なくないと思われる。しかも管見におよんだ45件の共伴例の半数足らずは埋葬数すら不明であるという欠陥があり、墓の構造や鏡の出土状況が記録された確実な事例を増やす努力が将来にわたって必要となろう。

検証をおこなう前に、この表から動物文鏡群と内行花文鏡との共伴例を抽出し、その型式の相関をみることによって、併行関係を確定しておきたい(表12)。表のアラビア数字は便宜的に段階を設定したものであり、動物文鏡群1～6は方格規矩四神鏡のⅣ～Ⅶ式およびそれに併行する獣帯鏡、盤龍鏡の各型式に対応し、内行花文鏡の1～6は四葉座のⅠ～ⅤB式およびそれに併行す



表11 後漢鏡の共伴関係

出 土	鏡 の 型 式	型式差	埋葬数	文 献
1 平壤石岩里M194	方Ⅳ×2・葉内Ⅰ	◎	2	楽浪漢墓1
2 平壤貞梧洞M1	方Ⅳ・ⅤB	△	2	考古学資料集6
3 江蘇高淳下壩墓	方ⅤA・Ⅶ	×	?	東南文化88-1
4 長沙月亮山M28	方ⅤB×2	◎	?	古文字研究14
5 浙江紹興漓渚M206	方ⅤB・Ⅵ	△	2	KG57-2
6 湖南耒陽M15	方ⅤB・線獣ⅣC・Ⅵ	×	2	KG56-4
7 湖南郴州M6	方ⅤB・ⅤC	○	?	KG85-8
8 湖南郴州奎馬嶺M2	方ⅤB・盤ⅠB	◎	2	考古学集刊2
9 広東南雄M2	方ⅤB・盤ⅠB	◎	?	KG85-11
10 平壤石岩里M6	方ⅤB・葉内Ⅱ	○	2	関野ほか1927
11 平壤貞柏里M122	方ⅤC・線獣ⅣB	○	2	梅原考古資料
12 江西南昌南郊M1	方ⅤC×2・葉内Ⅱ	△	?	KG66-3
13 河南滎陽CHM1	方ⅤC・Ⅶ×2	△	?	WW60-5
14 洛陽西郊M7011	方Ⅶ×2	◎	2	KGXB63-2
15 江西南昌丁M1	方Ⅶ・浮獣Ⅰ	×	2	KG78-3
16 陝西宝鶏鎡車廠墓	方Ⅶ・盤Ⅲ・葉内Ⅳ・蟬内Ⅰ	△	?	WW81-3
17 平壤貞柏里M2	線獣ⅣA・葉内Ⅲ	◎	2	関野ほか1927
18 平壤石岩里王盱墓	線獣ⅣA・葉内Ⅱ×2・円内Ⅰ	◎	2	楽浪
19 江西南昌南郊M2	線獣ⅣA・葉内Ⅱ・Ⅳ・ⅤA	×	6+	WWZLCK1
20 平壤楽浪里M85	線獣ⅣC・葉内ⅤA	○	2	考古学資料集1
21 陝西長安秦溝村墓	線獣Ⅴ・盤ⅡB・Ⅲ×2・蟬内Ⅰ	○	?	文博88-6
22 湖南耒陽城関	線獣Ⅵ・盤ⅡB	○	?	WW90-2
23 湖南湘郷西郊	線獣Ⅵ・盤Ⅲ	◎	?	KG65-12
24 長沙左家塘武M1	浮獣Ⅰ・葉内Ⅱ	○	?	湖南博物館文集
25 平壤貞柏里M13	浮獣Ⅰ・葉内Ⅲ	○	2	梅原朝鮮資料
26 長沙左家塘長M1	浮獣Ⅱ・盤ⅠB	◎	?	湖南博物館文集
27 広西貴県北M1	浮獣Ⅱ・盤Ⅲ	○	?	KG85-3
28 湖南資興M497	浮獣Ⅲ・盤ⅡB	○	2	KGXB84-1
29 平壤石岩洞墓	盤ⅠA・葉内Ⅲ	◎	?	朝鮮古蹟図譜1
30 陝西勉県紅廟墓	盤ⅠA・Ⅲ・蟬内Ⅰ	×	?	KG YWW83-4
31 平壤梧野里M25	盤ⅠB・円内Ⅱ	◎	2	昭和12年度報告
32 湖南資興M499	盤ⅡB×2・Ⅲ	○	2	KGXB84-1
33 広西昭平鳳M7	盤ⅡA・葉内Ⅰ	×	2	KGXB89-2
34 河南陝県劉家渠M8	盤ⅡB・葉内Ⅱ	×	3	KGXB65-Ⅰ
35 河南靈宝張湾M4	盤ⅡB・蟬内Ⅰ	◎	?	WW75-11
36 河南朱村	盤ⅡB・蟬内Ⅱ	○	2	KG56-6
37 西安白鹿原M13	盤Ⅲ・蟬内Ⅰ	○	?	KGXB56-3
38 平壤石岩里M9	葉内Ⅰ・Ⅱ	○	2	関野ほか1927
39 平壤貞柏里M200	葉内Ⅲ×2	◎	?	朝鮮綜鑑3
40 平壤貞柏里M4	葉内Ⅲ・Ⅳ	○	2	梅原朝鮮資料
41 洛陽姚溝西M14	葉内Ⅱ・円内Ⅱ	△	2	WW83-4
42 河南新安古路溝墓	葉内Ⅳ・円内Ⅲ	○	3	KG66-3
43 河南陝県劉家渠M11	蟬内Ⅱ・円内Ⅲ	◎	?	KGXB65-1
44 青海大通上孫家寨	蟬内Ⅱ×2	◎	?	WW79-4
45 湖南資興M511	円内Ⅲ×2	◎	2	KGXB84-1

鏡式名は頭文字で表示した。型式差の◎は型式差なし、○は1型式、△は2型式、×は3型式以上離れていることを示す。また中国発行の雑誌の略号は次の通り。考古(KG), 文物(WW), 考古学報(KGXB), 文物資料叢刊(WWZLCK), 考古与文物(KGYWW)。

表12 動物文鏡群と内行花文鏡との型式の相関

		動物文鏡群					
		1	2	3	4	5	6
内行花文鏡	1	2				1	
	2		3	2	2	1	
	3		2	2			
	4		1		1	2	
	5		1	1	1	3	4
	6					1	2

表13 後漢鏡の編年

BC AD		50	100	150
方格規矩四神鏡	Ⅳ	ⅤA ⅤB ⅤC	Ⅵ	Ⅶ
細線式獸帶鏡		ⅣA ⅣB ⅣC	Ⅴ	Ⅵ
浮彫式獸帶鏡		Ⅰ Ⅱ		Ⅲ
盤龍鏡		ⅠA ⅠB	ⅡA ⅡB	Ⅲ
四葉座内行花文鏡	Ⅰ Ⅱ	Ⅲ Ⅳ	ⅤA ⅤB	
蝙蝠座内行花文鏡			Ⅰ	Ⅱ
円座内行花文鏡		Ⅰ Ⅱ	Ⅲ	
漢鏡編年		5期	6期	

る蝙蝠座、円座の各型式に対応する。実年代によって方格規矩四神鏡Ⅳ式（動物文鏡群1）と四葉座Ⅰ式（内行花文鏡1）、細線ⅣA式獸帶鏡（動物文鏡群2）と四葉座Ⅲ式（内行花文鏡3）との併行を確かめているので、それ以外でみると、動物文鏡群5と内行花文鏡4・5、動物文鏡群6と内行花文鏡5・6との相関が比較的強いことがわかる。これをもとに一応の相対編年を組み立てたのが表13である。

### （1） 共伴関係による検証

再び表11に戻り、その型式差をみると、計算上は平均1型式ほどの誤差となり、危惧したわりにはよい結果があらわれている。しかし統計的にはどうであれ、3型式以上離れた異常なものについては、その原因を分析しておく必要がある。たとえば19の南昌2号墓例は6体以上を埋葬した、複数の世代にまたがったためであろうし、33や34の事例はともに後漢後期という墓の年代を参考にすると、内行花文鏡がなんらかの理由で伝世したためと推測される。ところが3と6と15の事例は、合理的な説明が難しく、あるいは方格規矩四神鏡Ⅶ式と細線Ⅵ式獸帶鏡の分類と編年に問題があった可能性もあり、検討の余地が残されている。なお、ここにあげた後漢鏡の共伴45例のうち13例がいま北朝鮮のピョンヤンに所在する楽浪漢墓の事例で、辺郡の、しかも多くは戦前の日本人による調査例でありながら、ほとんどが想定通りの正常な共伴関係となっていることにも注意する必要がある。

### （2） 実年代の比定

すでに銘文の考証によって方格規矩四神鏡Ⅳ式が王莽代、細線ⅣA式獸帶鏡と四葉座Ⅲ式内行花文鏡とが64年、浮彫Ⅱ式獸帶鏡が86年に一点をもつことが判明し、相対編年の前半部分についての実年代は比較的よくわかっている。実年代の不明な後半部分については、年代の判明してい

表14 紀年墓からの出土

墓	紀年銘	型 式	文 献
① 陝西長安三里村墓	104年朱書陶罐	蝙蝠座Ⅰ式内行花文鏡	文物58—7
② 天津武清鮮于墳墓	125年石碑	四葉座ⅤA式内行花文鏡	考古学報82—3
③ 河南襄城茨溝墓	132年朱書題記	蝙蝠座Ⅱ式内行花文鏡	考古学報64—1
④ 陝西戸県朱家堡墓	133年朱書陶罐	四葉座Ⅲ式内行花文鏡	考古与文物80—1
⑤ 陝西長安三里村墓	147年朱書陶罐	盤龍鏡Ⅲ式	文物58—7
⑥ 洛陽唐寺門2号墓	167年朱書陶罐	蝙蝠座Ⅱ式内行花文鏡	中原文物84—3
⑦ 洛陽燒溝147号墓	190年朱書陶罐	蝙蝠座Ⅱ式内行花文鏡	洛陽燒溝漢墓
⑧ 洛陽中州路813号墓	191年朱書陶罐	蝙蝠座Ⅰ式内行花文鏡	洛陽中州路

表15 紀年銘遺物との共伴関係

墓	紀年銘遺物	型 式	文 献
①平壤石岩里194号墓	BC85×3 BC43×2 BC23 BC8 AD3 AD9漆器	方Ⅳ×2・葉内Ⅰ	楽浪漢墓1
②平壤貞梧洞1号墓	BC85×2 AD5漆器	方Ⅳ・ⅤB	考古学資料集6
③江蘇邗江宝女墩墓	BC62 BC28 BC10漆器	葉内Ⅰ	文物91—10
④平壤石岩里9号墓	AD8×2漆器	葉内Ⅰ・Ⅱ	関野ほか1927
⑤平壤石岩里王肝墓	45 52 69×2漆器	線獸ⅣA・円内Ⅰ 葉内Ⅱ×2	楽浪
⑥平壤貞柏里200号墓	54 68漆器	葉内Ⅲ×2	朝鮮古文化綜鑑3
⑦平壤貞梧洞4号墓	71漆器	円内Ⅱ	考古学資料集6
⑧江蘇徐州銅山潘壩墓	77鉄刀	蝙蝠Ⅱ	文物79—7
⑨河南靈宝張湾4号墓	94弩機	盤ⅡB・蝙蝠Ⅰ	文物75—11
⑩陝西勉県紅廟墓	105銅洗	盤ⅠA・Ⅲ・蝙蝠Ⅰ	考古与文物83—4

る後漢墓からの出土を検討してみたい(表14)。墓の年代からはふつう鏡の下限を決めることができるけれども、複数の埋葬があるばあいには副葬された鏡がどの時点の埋葬のものかを判定することは容易ではない。たとえば表の①と⑤は同一墓の資料でありながら、後室からは104年に埋葬したことを朱書した陶罐、耳室からは147年の朱書陶罐が出土し、その時間差は43年もある。とはいえ墓室構造や出土状況に留意すれば、これらの紀年は十分に参考になり、表14によって蝙蝠座Ⅰ式内行花文鏡は2世紀第1四半期、同Ⅱ式と盤龍鏡Ⅲ式は2世紀第2四半期には出現していたと推測できよう。

表15は紀年銘遺物との共伴関係を列挙したものである。漆器は王莽の撫恤政策の一環として伝世品も併せて宮廷御用のものが地方に下賜されたため(榎本・町田 1974)、①～③ではその年代にかなりの幅があるが、④も含めて墓の年代は王莽代もしくは後漢初頭に位置づけられ、四葉座Ⅰ式内行花文鏡の年代もおおよそ見当がつけられる。また後漢代の紀年銘漆器と共伴した⑤⑥⑦は、複数の紀年銘漆器の年代幅が最大でも24年であり、墓の年代も1世紀後半に位置づけられ、推定した獸帯鏡や内行花文鏡の年代ともほぼ一致して問題がない。しかし⑩は共伴した鏡の型式差が大きく、⑧⑨も含めて参考程度にとどめておくべきだろう。

四葉座Ⅰ式内行花文鏡の出現が王莽代にあることについては、表15にあげた紀年銘遺物との共伴例のほかに、前漢の長安城内(中国社会科学院 1985)や茂陵の近く(陝西省 1965)で発見された青銅器窖蔵を例証とすることができる。その遺構はその特殊な性格や多数出土した青銅器の年代から王莽末期の混乱時に隠匿されたものと推測されるからである。

表13の編年に示した実年代は、以上のような手続きによってえられたものである。

### (3) 後漢墓編年との対応

組織的な発掘と研究によって、墓室や陶器の編年をもとに後漢墓を2期ないし3期に区分することが小地域ごとに試みられている。その成果によりながら、さきに組み立てた後漢鏡編年を検証してみよう。

表16は写真や拓本が報告されて型式が判定できる鏡について、洛陽地区の後漢墓編年との対応を示したものである。その編年は『洛陽焼溝漢墓』がまず後漢墓の3期区分と実年代の比定をお

表16 洛陽漢墓編年との対応

	4 期(40～75)	5 期(76～146)	6 期(147～160)
	方Ⅳ(焼溝M1023) 方Ⅶ(焼溝M25) 線獣Ⅵ(焼溝M21) 線獣Ⅵ(焼溝M113) 葉内Ⅰ(焼溝西M14) 円内Ⅱ(焼溝西M14)	葉内Ⅳ(焼溝M1029) 葉内ⅤB(焼溝M1027) 円内Ⅱ(焼溝M1008) 円内Ⅱ(焼溝M1009B) 方ⅤA(29区—M8) 方Ⅶ(防洪二段M23) 線獣Ⅵ(鉄M135) 盤Ⅲ(29区—M3)	方Ⅶ(焼溝M20) 盤Ⅲ(焼溝M1035) 葉内ⅤA(焼溝M148) 蟬内Ⅱ(焼溝M147)
西 郊	4 期	5 期	
		方Ⅳ(西郊M7043) 方Ⅳ(西郊M10025) 方Ⅶ(西郊M10024) 方Ⅶ(西郊M9014) 方Ⅶ(西郊M7011) 方Ⅶ(西郊M7011)	葉内Ⅰ(西郊M7054) 葉内Ⅱ(西郊M10016) 円内Ⅱ(西郊M7049)

表17 河南陝県劉家渠漢墓編年との対応

後 漢 前 期		後 漢 後 期		
2 組	3 組	4 組	5 組	6 組
	線獣Ⅵ(M23)	盤Ⅲ(M108)		方Ⅵ(M87) 盤ⅡB(M8) 葉内Ⅱ(M8) 葉内ⅤB(M102) 蟬内Ⅱ(M11) 円内Ⅲ(M11)

表18 湖南資興漢墓編年との対応

前 期	中 期	後 期
方 V B (M439)	方 V C (M129) 方 V C (M282) 方 V C (M523) 方 VII (M126) 方 VII (M338) 線獣 VI (M313) 円内 II (M521) 円内 III (M204)	線獣 VI (M489) 浮獣 III (M497) 盤 I B (M497) 盤 I B (M499) 盤 III (M499) 葉内 V B (M498) 円内 III (M405) 円内 III (M511)

表19 広州漢墓編年との対応

前 期	後 期	
方 IV (M4028) 方 V A (M4010) 方 V C (M4023) 方 V C (M4026) 線獣 IV A (M4005)	方 V A (M5011) 方 V A (M5018) 方 V C (M5009) 方 V C (M5004) 方 V C (M5011) 方 VI (M5013) 方 VII (M5028) 方 VII (M5039)	線獣 VI (M5028) 線獣 VI (M5076) 浮獣 II (M5054) 盤 I B (M5047) 盤 I B (M5052) 円内 I (M5045) 円内 II (M5009)

こない(洛陽区 1959), 洛陽西郊での調査では焼溝 5 期と 6 期をまとめた 2 期区分に改めている(中国科学院 1963)。その後, 洛陽に隣接する陝県劉家渠漢墓の調査報告では, 表17のように陶器の 6 組区分をもとに洛陽西郊と同じ 2 期区分をおこなっている(黄河水庫 1965)。それぞれの編年の優劣はともかく, 鏡の型式との対応をみると, いくつかの問題がみえてくる。まず鏡が予想年代よりも新しい時期の墓から出土していること, たとえば王莽代の方格規矩四神鏡Ⅳ式と四葉座Ⅰ式内行花文鏡が 2 世紀の西郊 5 期墓から出土していることは, 鏡の伝世の可能性があり, 問題はあまり大きくない。しかし逆に, 想定年代より古い時期の墓から鏡が出土していること, すなわち 2 世紀に下るはずの方格規矩四神鏡Ⅶ式と細線Ⅵ式獣帯鏡が焼溝 4 期墓から出土していることは, 漢墓編年の誤りでなければ鏡の編年にかかわる錯綜と考えられる。実は鏡の共伴関係においても同じような問題がこの 2 つの型式に発生していたから, 今後に慎重な検討が必要であろう。しかしこれ以外の型式については漢墓編年とほぼ矛盾なく対応していることが確かめられた。

中原における漢墓の編年研究が1960年代以降, 停滞したのにたいして, 1980年代にはいと華南における研究の進歩が著しく, 湖南省では東南部の資興において発掘した 107 基の後漢墓が 3 期に区分されている(湖南省博 1984)。中期に属する 133 年の紀年墓が唯一実年代のわかる資料だが, 鏡の型式との対応をみると(表18), いずれの型式も矛盾なく漢墓編年と対応していることがわかる。いっぽう, 広州漢墓では後漢墓を 2 期に区分し, 紀年墓を参考に 76 年に前後の時期の境

界を置いている(広州市 1981)。ほかの編年案に比べて前期の下限がかなり早く設定されているが、鏡の型式との対応をみると(表19)、前期墓から方格規矩四神鏡V C式が出土していることが鏡の編年にやや抵触することをのぞけば、ほかの型式には問題がない。

以上にみてきた後漢墓の編年は、多次にわたる追葬の普遍化が一因となって、なお流動的なところがあり、本稿では型式学的に組み立てた鏡の編年を検証するための目安として利用するにとどめた。結果として若干の型式に漢墓編年との錯綜が見いだされ、部分的な再検討の余地を認めながらも、全体的にはほぼ妥当な対応が確かめられたことにより、鏡の編年はほぼ検証されたと考える。

## 5. 後漢鏡の様式

前章までに検討した後漢鏡を2期に大別する。先行する前漢鏡を4期に区分しているので(岡村 1984)、それは漢鏡の5期と6期に相当する(表13)。

### (1) 漢鏡 5 期

後漢前期に相当し、方格規矩四神鏡V A～V C式、細線式獸帯鏡IV A～IV C式、浮彫式獸帯鏡I・II式、盤龍鏡I A・I B式、四葉座内行花文鏡I～IV式、円座内行花文鏡I・II式がある。四葉座I式内行花文鏡は、厳密には漢鏡4期の王莽代に出現したものであるが、様式上は漢鏡5期に含めて考える。

方格規矩四神鏡と獸帯鏡は漢鏡4期から連続的に変化してきたものであり、四神を主体とした瑞獣の構成による宇宙観が継承され、やがて変容していく過程として理解できる。ただし、方格規矩四神鏡は単位文様の変異が小さく、一系列の変化であったのにたいし、獸帯鏡は外区文様や乳が多様であり、この時期に細線式から浮彫式が分岐する変遷が確かめられた。内行花文鏡もまた漢鏡4期の連弧文銘帯鏡から変化してきたもので、それが簡略化する過程がたどれた。このような王莽鏡を継承した鏡式が多いなかで、盤龍鏡は躍動感ある立体的な浮彫表現をもってこの時期に創出されたもので、その後の画像鏡や神獸鏡に発達する手法の先駆けとなったことは評価すべきであろう。

漢鏡5期の銘文はほとんどが漢鏡4期の王莽代に出現した七言句の銘文K, L, Nからなっている。文様と同じように、銘文もまた前代からの連続性が強いのである。しかも簡略化の方向に進んだ方格規矩四神鏡はほとんどが「尚方作」であり、同じ変化をたどった細線式獸帯鏡にも「尚方作」が多くみられた。いっぽう盤龍鏡では「某氏作」や「青盖作」など民間での製作を明示した銘文が大半を占め、浮彫式獸帯鏡でも「某氏作」が多くみられた。数多く存在する「尚方」鏡がその通り宮廷工房の「尚方」の製作とは考え難いけれども、むしろここで注意すべきは、「尚方」をうたう鏡が前代からの踏襲によって退化の方向に歩んだのにたいして、新しい意匠を

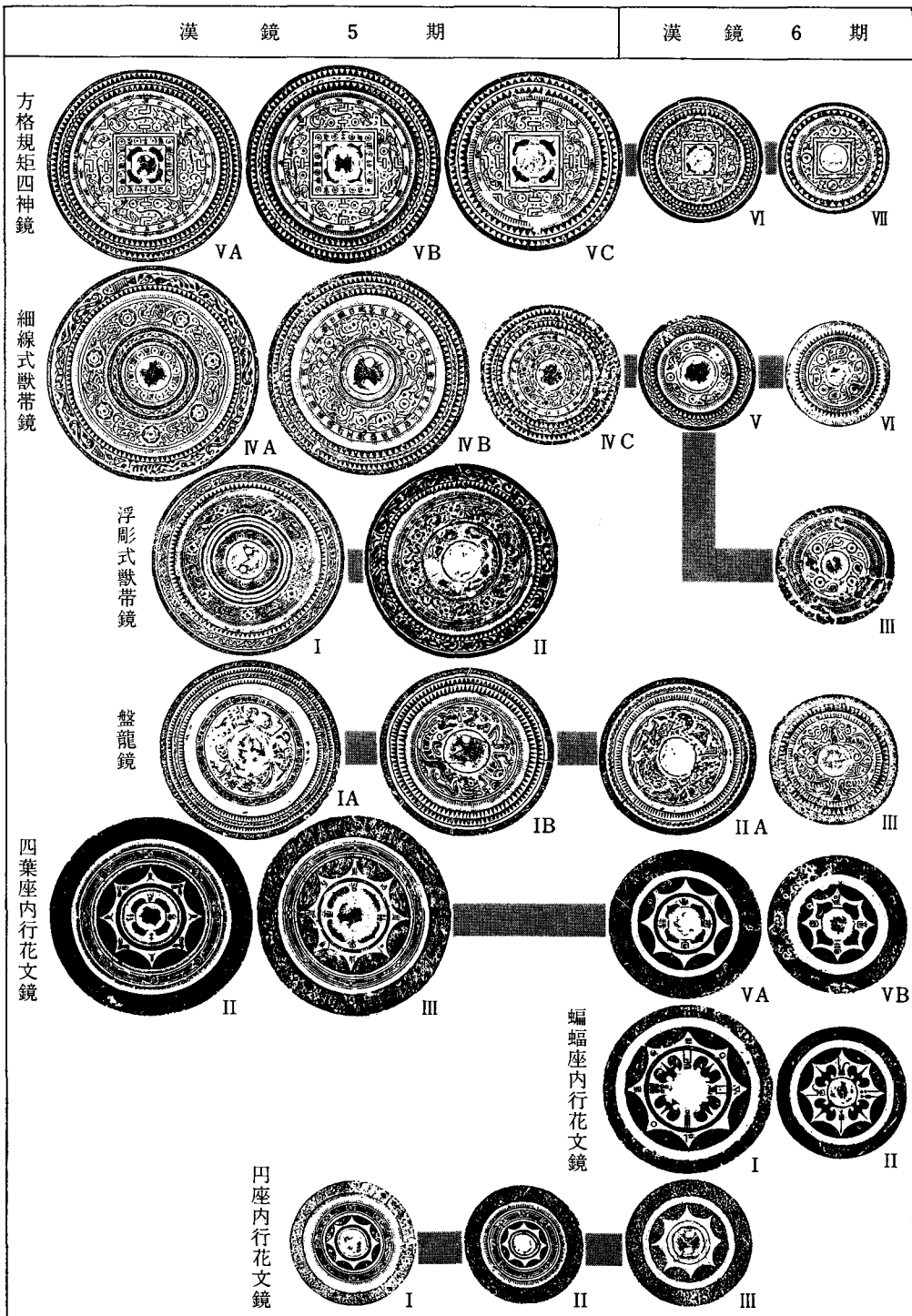


図22 後漢鏡の編年

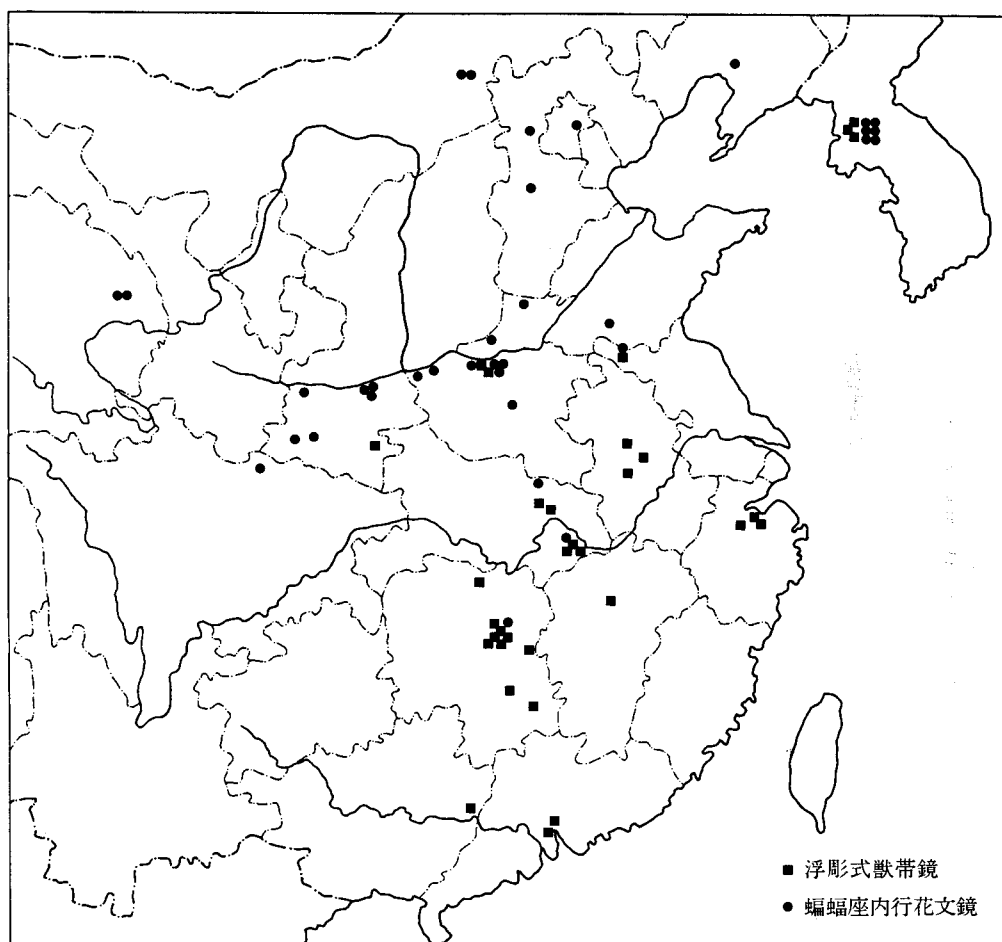


図23 浮彫式獸帯鏡と蝙蝠座内行花文鏡の分布

もって創出された鏡に民間の作者名が堂々と掲げられたことであり、ここに後漢代における民間活力の増大をかいまみることができる(岡村 1991)。

鏡式の全体的なあり方は、複数の鏡式が併存する多様性があると同時に、かりに動物文鏡群と呼んだように、瑞獣を主文とする方格規矩四神鏡と獸帯鏡、盤龍鏡の間には多くの単位文様の共有が確かめられ、鏡式相互の密接な連関が想定できた。しかしこれら動物文鏡群と幾何学的で清楚な文様をもつ内行花文鏡との間には単位文様の共有関係がほとんどなく、鏡式の面では大きく2相に分かれていたということができる。この様相は漢鏡5期の後半から漢鏡6期にかけてさらに増幅し、浮彫式獸帯鏡がおもに華南に、蝙蝠座内行花文鏡がおもに華北に分布するという、空間的な分化としても現出する(図23)。銘文からみると、当該期の鏡の製作地としては少なくとも中原と長江下流域と四川の3ヶ所があり、この分布から蝙蝠座内行花文鏡は中原のどこかに製作地があり、浮彫式獸帯鏡は漢鏡6期に分岐する画像鏡の分布を考えあわせると長江下流域に製作地が推定できるだろう。また図には示していないが、「青蓋作」銘の盤龍鏡や細線式獸帯鏡は洛



陽から長沙のラインより西に分布が集中し、四川あたりの有力な私営工房の作品と推定できる。もっとも方格規矩四神鏡や細線式獣帯鏡、盤龍鏡には地域的な偏りがとくに見いだせないから、中国の南北が様式的に完全に分化したわけではない。

## (2) 漢鏡 6 期

2 世紀前半の後漢中期に相当する。鳥文や渦文を主文とする方格規矩四神鏡Ⅵ・Ⅶ式と細線式獣帯鏡Ⅴ・Ⅵ式、浮彫式獣帯鏡Ⅲ式のほか、盤龍鏡ⅡA～Ⅲ式、雲雷文帯が素文凹帯になった四葉座内行花文鏡ⅤA・ⅤB式や蝙蝠座内行花文鏡Ⅰ・Ⅱ式、円座内行花文鏡Ⅲ式がある。このなかでは蝙蝠座内行花文鏡の出現がひとつの画期となるだろう。

蝙蝠座内行花文鏡や浮彫式獣帯鏡など特定の鏡式の地域的な偏りが顕著になり、長江下流域では浮彫式獣帯鏡から画像鏡が生み出され、四川では環状乳神獣鏡や獣首鏡、夔鳳鏡が創案される。画像鏡や神獣鏡には西王母やこの時期に新たに創造された東王公などの神がみが登場し、四神を主体とする瑞獣で構成された世界に替わる新しい宇宙が鏡に現れた点で、漢鏡様式上の大きな画期といえる。また儒教的内容の濃厚な四言句の銘文が出現することも大きな変化である。このほか双頭龍文鏡が出現し、おもに華北で用いられている(西村 1983)。双頭龍文鏡の平板な文様表現や断面形態などは蝙蝠座内行花文鏡と共通し、華北の代表的な鏡式といえるだろう。いっぽう漢鏡 5 期から連続する方格規矩四神鏡や盤龍鏡などは、地域的な偏りはあまりないが、文様の簡略化、小型化が進み、様式の首座から脱落する。

## おわりに

後漢前期に用いられ、中期に継続した鏡式について、型式学的方法によって型式分類と鏡式間の併行関係を明らかにし、漢墓によるその検証と年代比定をおこなった。対象とした鏡式と時期が限られたため、前漢鏡の文様や銘文にあらわれたような様式のうねりを描きだすには不十分であったが、そのぶん、漢鏡の体系的な編年を組み立てる方法をより細かく実践することができたと思う。論じ残した画像鏡や神獣鏡などの鏡式を同じ方法で分析し、2 世紀後半から 3 世紀初頭にかけての漢鏡 7 期までを通した後漢鏡の様式論を完成させることを次の課題としたい。

### 註

- (1) 鏡の図像文様にもとづく分類として、土器における「形式」や「器種」に相当する単位を「鏡式」と呼び、「鏡式」における時間的変化を示す分類単位を「型式」と呼ぶ。たとえば方格規矩四神鏡や内行花文鏡が「鏡式」にあたる。
- (2) 文様からみると、線書きの絵のため確実なことはいえないが、私のいうⅣ式またはⅤA式に相当し、銘文は通有のKで、「四」を「三」と表記している。王莽代または後漢初期の作品であろう。
- (3) 型式は鏡を構成する主要な単位文様の組合せによって設定するべきであり、作業仮説としてのこのような分類は、型式とは別の用語で呼ぶのが本当であろう。しかし混乱を避けるため、あえてここで

型式と呼ぶことにした。

- (4) 福岡県平原遺跡出土の方格規矩四神鏡のなかに「陶氏作」の銘文がある。方格規矩四神鏡としては異例であり、ほかの鏡式にも「陶氏作」はみあたらない。しかし文様は本稿の分析とは矛盾しない。
- (5) (広西 1978 : Pl. 123)の写真では「元和二年」のようにみえる。またその解説文で元和三年を西暦78年としているのは誤りである。

## 図出典目録

- |     |                  |                     |
|-----|------------------|---------------------|
| 図 1 | 四葉文 a ・ 雲 1      | 泉屋博古館蔵M11           |
|     | 四葉文 b ・ 十二支銘 a   | 羅 1916              |
|     | 四葉文 c ・ 十二支銘 b   | 個人蔵                 |
|     | 十二支銘 c           | 個人蔵                 |
|     | 雲 2              | 個人蔵                 |
|     | 断面形態 1           | 京都国立博物館蔵 J 甲169     |
|     | 2 ・ 3            | 個人蔵                 |
|     | 4 福岡市藤崎出土        | 九州大学文学部蔵            |
| 図 5 | 1                | 羅 1916              |
|     | 2                | 個人蔵                 |
|     | 3 湖北鄂城新化肥廠M 1 出土 | 湖北・鄂城 1986 : 5      |
|     | 4 平壤貞柏里M122出土    | 梅原朝鮮資料181           |
|     | 5 広州M5013出土      | 広州市 1981 : fig. 277 |
|     | 6                | 個人蔵                 |
| 図 6 | 盤龍文              | 樋口 1979 : Pl. 51-99 |
|     | 乳帯文              | 個人蔵                 |
|     | 細線               | 五島美術館蔵289           |
|     | 浮彫 a             | 五島美術館蔵173           |
|     | 浮彫 b             | 和泉市久保惣記念美術館蔵        |
|     | 唐 a 1            | 神戸市立博物館蔵 中国 5       |
|     | 唐 b 1            | 劉 1935 : 巻16        |
|     | 画 1 ・ 断面形態 1     | 個人蔵                 |
|     | 断面形態 2           | 五島美術館蔵289           |
|     | 断面形態 3           | 五島美術館蔵174           |
| 図 9 | 1                | 個人蔵                 |
|     | 2                | 劉 1935 : 巻15        |
|     | 3                | 五島美術館蔵289           |
|     | 4 陝西勉県老道寺M 2 出土  | 『考古』1985年第 5 期      |
|     | 5 河南滎陽河王水庫M 4 出土 | 『文物』1960年第 5 期      |
|     | 6                | 『嵩雲居藏鏡集』55          |
| 図10 | 1                | 五島美術館蔵174           |
|     | 2                | 広西 1978 : Pl. 123   |
|     | 3                | 五島美術館蔵175           |
|     | 4                | 湖北・鄂城1986 : 11      |
| 図12 | 左                | 五島美術館蔵149           |
|     | 右                | 個人蔵                 |
| 図15 | 1                | 和泉市久保惣記念美術館蔵        |
|     | 2                | 北九州市立考古博物館蔵         |
|     | 3                | 神戸市立博物館蔵 中国13       |
|     | 4                | 京都大学文学部博物館蔵3476     |
| 図16 | 1                | 関野ほか 1927 : 1307    |
|     | 2                | 和泉市久保惣記念美術館蔵        |
|     | 3                | 北九州市立考古博物館蔵         |

- 4 梁 1941 : 2 下55  
 5 個人蔵  
 6 樋口 1979 : Pl. 76-151
- 図17 断面形態 1・2 平壤石岩里M9 出土 関野ほか 1927 : fig. 19  
 3 五島美術館蔵134  
 4 五島美術館蔵133  
 5 梅原朝鮮資料5470  
 6 五島美術館蔵135  
 7 個人蔵  
 8 明治大学 1988 : Pl. 19
- 図20 1・2・3・5 劉 1935 : 卷16  
 4 洛陽焼溝M1029出土 洛陽区 1959 : fig. 75  
 6 劉 1935 . 卷15
- 図21 1・2 劉 1935 : 卷16  
 3 個人蔵  
 4 洛陽焼溝M1009B出土 洛陽区 1959 : fig. 75  
 5 明治大学 1988 : Pl. 19

私が作製した図はその所蔵者を記した。

## 文 献 目 録

- 宇野隆夫 1977 「多鈕鏡の研究」(『史林』第60巻第1号)  
 梅原末治 1925 a 『鑑鏡の研究』  
 梅原末治 1925 b 「方格規矩四神鏡に就いて」(『考古学雑誌』第15巻第7号)  
 梅原末治 1935 『漢以前の古鏡の研究』(『東方文化学院京都研究所研究報告』第6冊)  
 梅原末治 1943 『漢三国六朝紀年鏡図説』(『京都帝国大学文学部考古学資料叢刊』第1冊)  
 岡村秀典 1984 「前漢鏡の編年と様式」(『史林』第67巻第5号)  
 岡村秀典 1991 「秦漢金文の研究視角」(『古代文化』第43巻第9号)  
 岡村秀典 1992 「浮彫式獸帶鏡と古墳出現期の社会」(出雲考古学会編『出雲における古墳の出現を  
 探る』)  
 榎本杜人・町田章 1974 「漢代紀年銘漆器聚成」(『楽浪漢墓 大正13年度発掘調査報告』第1冊)  
 黄河水庫考古工作隊 1965 「河南陝県劉家渠漢墓」(『考古学報』1965年第1期)  
 広州市文物管理委員会・広州市博物館 1981 『広州漢墓』(『中国田野考古報告集』考古学専刊丁種 第21  
 号)  
 広西壮族自治区文物管理委員会編 1978 『广西出土文物』  
 後藤守一 1926 『漢式鏡』  
 湖南省博物館編 1960 『湖南出土銅鏡図録』  
 湖南省博物館 1984 「湖南資興東漢墓」(『考古学報』1984年第1期)  
 湖北省博物館・鄂城市博物館 1986 『鄂城漢三国六朝銅鏡』  
 小林三郎 1959 「内行花文鏡の意義」(『考古学手帖』9)  
 小林行雄 1971 「三角縁神獸鏡の研究」(『京都大学文学部紀要』第13)  
 鈴木博司 1970 『守屋孝蔵蒐集方格規矩四神鏡図録』  
 関野貞ほか 1927 『楽浪郡時代の遺蹟』(『古蹟調査特別報告』第4冊)  
 陝西省考古研究所 1965 「陝西興平県出土の古代嵌金銅犀尊」(『文物』1965年第7期)  
 高橋健自 1911 『鏡と剣と玉』  
 高橋 徹 1986 「伝世鏡と副葬鏡」(『九州考古学』第60号)  
 田中 琢 1979 『古鏡』(日本の原始美術8)  
 田中 琢 1983 「方格規矩四神鏡系倭鏡分類試論」(『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立三十周年  
 記念論文集)  
 中国科学院考古研究所洛陽発掘隊 1963 「洛陽西郊漢墓発掘報告」(『考古学報』1963年第2期)  
 中国社会科学院考古研究所漢長安城工作隊 1985 「漢長安城発現西漢窖藏銅器」(『考古』1985年第5期)

- 富岡謙蔵 1920 『古鏡の研究』  
西村俊範 1983 「双頭龍文鏡（位至三公鏡）の系譜」（『史林』第66巻第1号）  
林巳奈夫 1973 「漢鏡の図柄二，三について」（『東方学報』京都第44冊）  
林巳奈夫 1978 「漢鏡の図柄二，三について（続）」（『東方学報』京都第50冊）  
樋口隆康 1953 「中国古鏡銘文の類別的研究」（『東方学』第7輯）  
樋口隆康 1979 『古鏡』  
福永伸哉 1991 「三角縁神獣鏡の系譜と性格」（『考古学研究』第38巻第1号）  
藤丸詔八郎 1982 「方格規矩四神鏡の研究」（『考古学論考』小林行雄博士古稀記念論文集）  
三宅米吉 1897 「古鏡」（『考古学会雑誌』第1編第5号，同『考古学研究』1929年に再録）  
明治大学考古学博物館編 1988 『明治大学考古学博物館蔵品図録1 鏡』  
森 鹿三 1963 「居延出土の王莽簡」（『東方学報』京都第33冊）  
山越 茂 1974 「方格規矩四神鏡考」（『考古学ジャーナル』No. 93・95・96）  
山本三郎 1978 「舶載内行花文鏡の分類について」（『播磨・竜山5号墳発掘調査報告』高砂市文化財調査報告6）  
洛陽区考古発掘隊 1959 『洛陽焼溝漢墓』（『中国田野考古報告集』考古学専刊丁種第6号）  
羅 振玉 1916 『古鏡図録』  
劉 体智 1935 『小校經閣金文拓本』  
梁 上椿 1940～42 『巖窟藏鏡』  
Karlgrén, B. 1941 Huai and Han, *Bulletin of the Museum of Far Eastern Antiquities*, No. 13

## 付 記

本稿は京都大学大学院に提出した1983年度修士論文「漢鏡の編年と様式」の一部を書き改めたものである。怠慢ゆえに10年が経過したが，その間の資料の増加，とりわけ多くの方々のご好意によって実物に接して観察できたことにより考察を深めることができた。改めてお礼申し上げたい。なお，すでに「中国の鏡」（『弥生文化の研究』第6号，1986年）や「卑弥呼の鏡」（『邪馬台国の時代』，1990年），「後期の銅鏡」（『東アジアと九州』日本考古学協会1990年度大会発表資料集）などで後漢鏡編年の概略を示し，それをもとに日本出土鏡について議論しているが，いずれも本稿の編年案を基礎としたものであることを付記しておく。

（九州大学文学部）

## The Chronology of Later Han Mirrors

OKAMURA Hidenori

Han mirrors have often been used as a measure to pinpoint historical periods, and have become point of contact between Chinese and Japanese archaeology. In this paper, I attempt, using style methodology based on the analysis of attributes, a detailed type-classification of the following four types of Later Han mirrors: TLV mirror with four guardian spirits; animal-belt mirror; relief dragon mirror; and linked-arc mirror. I also suppose a parallel relationship between the mirror types, establish a systematic chronology of Later Han mirrors, and finally, verify the chronology by comparing it with that of Han graves in China. On the basis of this chronology, I classify Later Han mirrors roughly into three periods, and attempt a comprehensive understanding of the stylistic changes that appeared in the design, inscription, mirror type assemblage, and spatial distribution.